# 死神鎌と恋心

山波太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神鎌と恋心

【Ｎコード】
Ｎ７６５０Ｗ

【作者名】
山波太郎

【あらすじ】
死神になろうとする少女が、とある少年を死なせようとするお話。
全３８話。

# 序

梅雨だというのに晴れが続く。
そもそも今年は空梅雨で、雨はほとんど降っていない。湿気もそれほど多くない。本当にいまはその時期か、と主婦らが集う井戸端会議には毎度のようにその話題が挙がる。
そんな夕暮れ。
衣替えが終わってだいぶ経つというのに、冬服のままで夕暮れを歩く女子高生の姿があった。季節柄の違和感はあるが、それでも日焼けのまったくない白い肌と均整のとれたきれいな顔立ちは、すれ違う人が振り返るほど美しい。むしろ制服の黒色が彼女の魅力を際立たせる要因ともなっている。年齢以上に大人びても見えた。
その彼女、名前を西崎篠乃という。
暑いだろうに汗はまったくかいていない。腰の中程まである長い髪も水気を含まず風に遊ばれてさらさらとなびいている。
今年の梅雨明けの発表はだいぶ早くなりそうだ。
と、西崎篠乃は沈む夕日に向かってそんな予想を立てた。それを思うとなんだか心が弾んだ。この分なら、七月初週にある自分の誕生日までにはおそらくもう明けているかもしれない。

――そう、誕生日……。
その日が刻々と迫っている。篠乃の自尊心を苛んで離れない。篠乃は吐息を大きく漏らすと、同時にそれと同じだけ肩を落とした。
自宅に帰って、その憂鬱を母親に吐露する。
「ねえ、もう私の誕生日、もう近いんだけど」
そこは母親の寝室で、そして母親は自身のベッドに全身を預けていた。窓から入る夕焼けの日がそれを照らす。
「ふうん、だから？」

「だから誕生日」強調して篠乃は言う。「……近いんだけど」
「いや、だから？」母親は億劫そうに聞いている。「……そういえばあんた、いくつになるんだっけ？」
「……十七」ぼそりと言う。
篠乃にとってはあまりいい数字とは言えない。大きくなりすぎている。いや、遅すぎていると言った方がより正しいか。
その思いを切実に訴える。
「ねえ、もう四年も遅刻してるの」そのさまは懇願ですらある。「もういい加減、許してくれてもいいじゃない？」
「あたしは何も怒っとらんが？」
「私が死神になるっていう、その許可を出せって話だよ！」
突っ込みとも嘆きともつかない声だった。
それを聞いた母親は、うんざりしたような顔を篠乃に向ける。
「あんた、まだ諦めてなかったの？」
寝起きのようだった。目は不機嫌そうに娘を見ている。ともするとそれは睨んでいるようにも見えた。
「毎年お願いしてるでしょ」
篠乃は苛々が募っていく。言葉に込める怒気も段々と増していく。母親の視線は気にしない。もう慣れたもののようだった。
「去年もお母さん言ったよね、もう一年待ちなさいって。っていうか、死神は十三歳になったら一人前になるんでしょ？　それを私は……今年で十七歳なんだよ？　なっちゃうの！」
あー、と母親は唸る。
「そういえばそうだった。あんたの泣き顔も毎年のことだったね」
「……泣いてないわよ」
篠乃はすぐに嘘をつく。
それを母親は知っている。
「本当にぃ？」母親は邪悪な笑みを作る。「去年だって実は部屋で泣いてたくせに？」
「な、泣いてないってば！」一番大きな声で否定する。

母親はそれ以上突っ込むことをせず、寝ていた体を起こした。左手でこめかみの片方を押さえている。
「あたしは、あんたに跡を継いでほしくなんかないんだけどね……。どうしてそんなにあんたは死神なんかになりたいわけ？」
「それは……」言い淀む。「……なりたいからよ。悪い？」
「別に悪いってわけじゃないけどさ……」母親は語る。「虚しいよ？　面倒くさいよ？　みんな泣いてる中で『まだ行きたくない』って駄々こねてるのを強引に連れて行ったり、気付いてないのがいたら説得して送り出したり。生きてる人にはダレにも気付いてもらえないし、それなのに人から無意味に嫌われたりも……。いいことなんてひとつもありゃしない」
それに、とこれが重要とばかりに声の調子を落として母は言う。
「ときどきでもね、人を死なせないといけない」
「わかってる」
もう何度も聞いた、と言わんばかりだった。
「わかってないと思うんだけどね」
「わかってるって。私怒るよ！」もう、怒っている。「それに、私はお母さんの跡なんか継ごうって気はないの！　そういうんじゃないの」
私は私の意思で死神になりたいの！
と、篠乃はそう言うのだが、その思いの強さが母親に通じたかどうかは疑わしい。
母親は押し黙って難しい顔をするだけだった。
沈黙がふたりを包む。
「……なんで、許してくれないの？」
篠乃の怒りは会話の停滞した中で嘆きへと変わる。数秒前の怒声とは裏腹に、それは鼻にかかった泣き声になっていた。
「だってあんたドジだし馬鹿だし。絶対に無理だから」
しかし、それはやはり怒りへと変わる。
「ドジじゃないし！　馬鹿じゃないし！」

勢いよく、そして真っ赤になって言った。
その篠乃を母親はまっすぐに見据える。
無言の圧力。言い切ったときにはたしかにあった自信を篠乃は失う。
「少なくとも、馬鹿じゃないもん……」
それでもこれだけは譲れない。
「ほう」
感情豊かな篠乃とは対称的に、母親の起伏は安定していた。一定して自分の娘を馬鹿にしている。
「これでも一応、進学校で主席なんだよ？」自信なさそうに答えた。
「そんなことを言ってんじゃないんだよ、あたしは」それを母親は見下した。「それを汲み取れないから馬鹿だって言ってんだ、このバーカ」
ぐっ、と篠乃は顔を強ばらせる。何も言い返せない。拳を握ってただ全身を震わせるだけだった。歯は唇を噛み、そこが一番わなないている。濡れる瞳で訴えるも母親は何ひとつ態度を崩さない。
にわかに、篠乃の震える右手が光り出す。きらきらと光る粒子のようなものがそこへと集っていく。そしてその光はそこへ握られるようにして何かを形取っていく。
「おーっと、ここで『鎌』を出すんじゃないよ？」それを見た母親はぴしゃりと言う。
いままでのふざけている口調とは明らかに違う。保護者が諫めるそれだった。
「出したら私は絶対に許可しない。ていうかもう永久に許可しない」
それを聞いた篠乃は体をびくんと硬直させる。大きな鎌の形になりかけた光は霧消し、いまは何もない。握った拳は力強く開かれた。もうしないという意思表示だろうか。
その様子を見た母親は、深いため息をつく。
「簡単にそうやって取り乱して、それで毎年毎年暴れるんじゃないよ。この家の風物詩か？　そんなんだからいつまで経っても許可で

きないんだ」
「馬鹿にしたのはそっちが先なのに……」
「それがどうしたって？」
篠乃は黙せざるを得ない。
激すれば、それだけで負けだ。
「私は死神にならなきゃいけないのに……」またしても萎れた。「どうしてわかってくれないの？」
完全な泣き声である。ずず、と一度鼻をすすった。
「毎年、毎年、ダメだって言われても、ひとりで勉強して、頑張って……。お母さんだって知ってるでしょ？　私がどれだけ死神になりたいか……」
「こっちこそ何度も言わせないでよ」母親は娘に諭す「別にあんたはならなくていい、って言ってるのよ？」
「それでもなるの！」篠乃は怒鳴った。
嘆きと怒りとが合わさっている。感情という波は非常に高く、篠乃自身を飲み込んでいく。頬を一筋の涙が伝う。
「これじゃあいい加減、忘れられちゃうよ！」ついには嘔吐き始めた。
それは号泣への呼び水となった。またたく間に篠乃の瞳からは滝のごとくあふれ出す。
もう何を言っているのか判別に難しい。
それでも母親は難しい顔をして解読に努める。
「え？　何に忘れられるって？」耳を篠乃に向ける。
「忘れないでよ！」娘はわめく。
母親は向けた耳を今度は塞ぐ。
「だからなに？」篠乃の泣き声に合わせようと、声量が自然と大きくなった。
「守城藤太くん！」
「すじょう……ごめん、だれ？」
「忘れないでってぇ！」

「ごめん！　ヒント！　ヒントちょうだい！」
娘の理解に努めようとする母親の努力が伝わったのか、篠乃は少し静かになった。
そしてしゃっくりとともに答え出す。その手の甲は雨に打たれたように濡れていた。
「昔……隣に住んでた……同い年の……男の子」
それには母親も心当たりがあった。合点が言ったように表情が晴れる。
「あーはいはい、守城さんとこの息子ね。そういえば同い年だったね。そう言ってくれないとわかんないって」そして笑みを消して訊く。「で、それがどうしたって？」
「約束……したの……。大きくなって、死神になるときが来たら、私の、一番になってって……」
「私のために死んでって？」
「うん……」
「約束してくれたの？　本当に？」
「うん……。ちゃんと、指切りまで……」
「ああそうなの……」母親は呆れた。たかが指切りだ。「絶対に忘れてる」
苦く笑ってぼつりと言う。
その嘲りの独り言に、篠乃は大いに反応する。
「忘れてない！」
「あんたいまそう言ったじゃん！」
「忘れられちゃうって言ったの！　早くしないと！」篠乃の涙は止んだが、それでも激昂は続く。「だいたい、お母さんだって、この話いつもしてるのに、すぐ忘れちゃって」
「ごめんごめん」娘の感情が収束しつつあるのに安堵する母親。
ふたりのそのさまは、もうただの母と子、あやしあやされる関係となりはてていた。年相応とも言いがたい。
だがその会話の内容は恐ろしく物騒だ。人間ひとりの命を奪うか

どうか、ということである。
しばし思案に暮れる母親。
「うーん……いまのあんたがやっても、失敗する確率の方が高いよ？」
それでも、と篠乃は断固として譲らない。
「やる。死んでもやる」言って母親を睨む。
「死んでもってあんた」その母親は噴き出して笑う。「仮にも死神になろうとしてんのに死ぬ思い固めてどうすんの」
「もうお願い、なんでもするからお願いします。私を死神にしてください！」
母親は篠乃を見ない。
この話が収束に向かうかどうかは、偏に母親の手にかかっている。
母親は思った。
――もう、面倒くさい。
「そうだねぇ。今年は『鎌』、出して暴れなかったし」
一気に篠乃の顔が明るくなった。
とてもわかりやすい反応だった。人によっては意地悪さえしたくなる。
「でも泣いたしなぁ」
萎れる。
「ごめん嘘」頭をかく。「いい加減、許してあげないとかわいそうだしねぇ。いいよ、ひとり死なせることができたら、あんたは立派な死神ってことだね」
そして母親は、数年来の満面に光る娘の笑みを見る。
「えーっと」はしゃぐ娘に訊いた。「で、本当にあんた、守城さんとこの息子にするの？」
「え？　ダメ？」
「ダメじゃないけど、……うーん」
「なによ？」
はっきりとしない母親の態度に篠乃は機嫌を損ねる。

「どうしても、守城さんとこにするの？　なんだったら適当に見繕うけど？」
「しつこいなぁ、お母さん。私は藤太くんと約束したの！　だから約束は守らなきゃダメでしょ？」
「ふうん」思案顔の母親。「ま、いいか」
「うんいいの」またしても笑う。「それじゃあ、いろいろと準備あるから。ありがとう、お母さん」
数分前まで泣いていたことなど微塵も漂わせなかった。その顔のまま篠乃は部屋を後にする。
篠乃が出て行くと、残った母親は深く深く、ため息をついた。
「ああ面倒くさ」

# 1

守城藤太は汗だくになりながら眠りから覚めた。
外からは蝉の声が聞こえている。さっとカーテンが開けられた窓は朝日を通し、藤太の肌をさっそく焼き始める。時節としては梅雨が明けたばかりだ。が、もう夏には違いない。蚊だってすでに現れはじめたようで、寝てる間に藤太の血を吸っていた。左の太ももにその跡を見つけ、寝汗の不快感とともにそこを掻く。
――暑い。
藤太は舌打ちとともに思った。
夏はまだ始まったばかりである。七月になって始めの週だ。しかも今は朝なのだ。その早い時間帯から茹だるような熱気がそこらじゅうに蔓延している。八月になったなら自分は溶けるだろう、と陰鬱になった。
「実際、溶けることってあると思う？」藤太は半身を起したままで口を効く。
目は虚ろだ。まだ半分くらいは寝ぼけている。
「知らないよ」そこにいた知恵はぞんざいに返した。「そろそろご飯食べないと遅刻するから早く下りておいで」
そう言って知恵は部屋のドアを閉めると、先に階段を下りていった。藤太はそのドアを恨めしそうにしばらくの間見ていた。行きたくないと切実に思っている。行けば、この布団にはしばらく戻ってこられないだろう。それは藤太の望むところではない。
それでも母親の言には逆らえないと、もそもそとベッドから抜け出した。寝巻に使っているTシャツは皮脂と汗で薄ら汚れている。そしてそれが皮膚に纏わりつき、酷く不快に思えた。
知恵が藤太の顔に異変を見つけたのは、味噌汁を啜った直後だっ

た。知恵は食事をするときはいつも汁物から口をつける。
「あんた、どうしたの？　その目のクマ」それでも箸は止めない知恵。
藤太の目の下には立派なクマができていた。もともと満面の笑顔は絶対に見せそうにない無愛想な人相だが、そこへ凶悪さも兼ね備えるまでになっていた。今日藤太と顔を合わせる人間は誰だって驚くことになるだろう。それは藤太のことを知っている、知っていないを問わず。
実際知恵は一瞬だったが目を見開いた。
それでも心配しているわけではなさそうだった。あくまで会話をするネタの範疇で話をふった程度だ。
「眠れなかった」藤太はぼつりと言った。
一般的に考えられる中で、もっとも多く主張される原因だろう。藤太はまだ眠り足りないように目を擦る。
「このクソ暑いってのに布団なんてかぶって寝るから……」知恵は呆れた声になった。
これは藤太の癖についての言及だ。藤太は眠るとき、頭まで布団をかぶるという変な癖を持っている。暗闇が怖いというわけではないが、だからこその癖でもある。いつから、またどうしてそうなったのか、藤太自身もわからない。夏場は当然蒸すが、それでも藤太は我慢する。
眠れないのは当然と言える。
が、藤太はそれを、ちがうと否定した。
「そういうんじゃないんだよ。本当に暑かったら毛布で我慢するし」
それでも布団をかぶる奇癖は変わりない。毛布は体、布団は頭というスタイルは守城家における夏場の風物詩となっている。主に笑うのは知恵だけだが。
ではなんなのか、と知恵は意外そうな顔をする。
「なんか……」藤太の顔が曇る。「変な夢、見た」
――かちゃり。

茶碗を置く音が藤太に聞こえた。
「それ、どんな夢？」知恵の箸が止まる。
藤太は寡黙ではないが、別段饒舌でもない。そして低血圧の気があるために寝起きの気分はあまり上がらない。元来の不精と併せて朝は言葉少なになる傾向が強い。
だから。
「忘れた」
これで済まそうとした。眠いならなおさら面倒だ。
それを知恵は許さない。いいから話せとしつこくせがんだ。
あまりに執拗だったので最終的に藤太は折れた。
「俺が死ぬ夢」嫌そうに答えた。
憶えていることは憶えていた。
さすがにそんな夢を嬉々として語る人間はいないだろう。さっさと忘れたいと、験を担ぐ人間ならそう思うかもしれない。語るも聞くのもはばかられる。それでも知恵は先を促した。
――どうもいつもと調子が違う。
母親の態度を見て、藤太はそう思った。普段の知恵は藤太のことなどどうでもいいような、そんな態度をとることが多い。放任主義というのだろうか。しばらく母親を上目遣いで観察したが、適当を言って逃げられそうにもなかった。藤太は観念して、先を続けた。
「通り魔……に刺されたのかな」すでにおぼろげになりつつある記憶を探る。「いや、斬られたのかも」
憶えているのは背景の黒。金属光沢。さらりとした長い髪。そして、真っ赤に噴き出る血。
目先を中空に泳がせながら、それらをとつとつと語った。それでも失われてしまった記憶の方が多い。
その夢がまるで睡眠を妨害するように、微睡むたびにやってきた。そう最後に付け足して、藤太の説明は締められた。
それを聞き終えた知恵は力なくため息をついた。
「どしたの？」藤太は訊いた。

「いや、辻褄がさ……合っちゃうなあって」知恵は苦笑いで誤魔化す。
誤魔化したのはおそらく不安だ。自然と今度は知恵が語る番になった。同じように、昨夜見た夢の話である。
――あんたの、葬式の夢だったのよ。
その言葉が藤太の耳に木霊する。
「……あん？」
しかし、それはあまりに唐突で、主旨というものが見えてこない。
気がつけば藤太は首をかしげていた。
「だから、あんたの葬式してる夢」伝わっていないと思った知恵はもう一度言う。
それはわかっている、と藤太は言おうとした。しかしそれより先に、知恵は少し前の藤太のように、断片的に語りだす。
鯨幕。坊主頭と響く読経。祭壇、、弔花、戒名の書かれた位牌。泣き崩れる人。そして遺影は藤太、笑っている。
「いい笑顔だった」知恵は瞑っていた目を開く。「そんな問題じゃないけど、さ」
それを聞いた藤太は眉を寄せた。目にできたクマと併せて不機嫌さに磨きがかかって見える。事実そうだろう。夢であっても人の葬式を語られて、気分がよくなる高校生はいない。ましてや母親に語られるのであればなおさらだ。
「ふざけんなよ」一言で捨てる。
「ふざけてないよ」それをまた知恵が拾う。「それで心配になって、あんたの夢なんか訊いちゃったんだから」
藤太の言う『ふざける』とは、そんな夢を見るなという意味だが、知恵が言った意味はまた違う。その点、食い違いが生じている。
しかし、それで藤太は合点がいった。だから、夢見が悪かったと言っただけで食いついてきたのだ、と。それでもやはりたかが夢だと藤太は思う。気にしなければそれでいい。
だがしかし、気になってしまうのが人情、母性というもの。なの

かもしれない。
「その遺影さ」藤太は訊く。「親父だった、とかじゃないの？　俺もそろそろ……」
――親父が死んだ歳に近づいてきたし。
しかしそこまでは言わなかった。言わなくてもわかるだろうし、言わない方がいいことでもある。実際はまだそれほど父の享年に近づいたわけではないが、面影は十分似ている。奥座敷に飾られているその遺影を見るたび、不本意ながらもそれを自覚している藤太である。つまり、知恵が見たのはその父の葬式ではないか、と言うのだ。
それを知恵は一蹴した。
「友康さんはもっとダンディになってから死んだよ。あんたなんてまだまだ……」両手のひらを天井に向けて顔をふる。
だから、見間違うはずがないのだ、と得意げに言った。
友康とは言わずもがな藤太の父、そして知恵の夫である。享年は二十六歳。藤太が三歳のころに他界した。
「ああそうかよ」藤太はいやそうに返した。
比べられることを嫌うのだ。藤太にとって父親はほとんど知らない人間といっていい。物心がつき始めるころにいなくなったのだ。そんな人物に自分を当てはめられても困る、という。夢で見たという遺影について、口を滑らしてしまったと後悔した。
「で、藤太」知恵は少し真顔になって話を戻す。「夢で辻褄が合うっていうのも珍しいもんでしょ？　これって一種の虫の知らせだと思うのね。だから当分は、用心なさいよ」
「用心ってなに？」
「とりあえず早く帰っておいで。学校終わってもブラブラしてないで」
知恵は藤太の夢であった、黒い背景を夜と捉えた。
藤太もその解釈については同意だった。が、そのように命令されるのは気にいらない。目を逸らして黙り込んだ。

「ちょっと、聞いてる？」
「……遅れるよ？」目を合わせないまま呟いた。「先生」
知恵の社会的立場は小学校教師だ。藤太が先生と敢えて言ったのはその立場から来ている。
知恵は壁掛け時計をハッと見た。七時四十分を指している。車で普通に向かえば二十分で着くが、間に合わない。それは授業ではなく、その前にある職員朝礼のことをさす。
「……と、やば！」一気に朝食を摂取し始める知恵。
今までしていたのは摂取ではなく、言うなれば食事だ。残すという選択肢はないらしい。藤太はいつも、教師ってのは体力勝負なのだ、と知恵から聞かされている。朝飯を抜けば勝負ができないということだろう。
「あとお願いね」
片づけなどは藤太がやる。これが家族としての役割だった。
藤太はそれを生返事で返し、玄関の戸が閉まるのを耳で確認した。その数秒後に知恵は自家用車のアクセルを全開にして出ていった。そしてそれを聞き終えてから、藤太も朝食を再開した。まだ自分が出るまでには時間がある、と余裕を持って。

朝食を終えた後、その片づけをしてから家を出た。まだ眠いようで玄関の鍵を掛けるときにあくびが出た。藤太はいつも思う。
――もっとゆっくり寝かせろ。
藤太が通う高校は、八時三十分に校門をくぐれば遅刻にならない。始業はその十分後である。その高校までは徒歩で十五分の道のりだ。だから、八時十分に出れば悠々と間にあう。が、起こされるのは七時二十分。もし藤太がひとりで朝食を食べるのなら、もう少し寝ていられる計算だ。不満というにはまだ足りないが、釈然としないのは確かである。どうして一緒に飯を食べるのか、と。その親心を解するには、藤太はまだ若い。

## 2

八時二十五分。理論通りの時間に藤太は校門をくぐるに至った。その門のすぐ横にはジャージ姿の体育教師が仁王立ちしていた。中年、男で、角刈りが印象深い。機嫌悪そうに、登校する生徒を睨んでいる。遅刻しそうな生徒を急かすのが目的だろう。

しかしその時間にはまだ少し早い。

藤太は一礼をして通り過ぎようとした。

「昨日は……」体育教師がぼそりと言った。「また、やらかしたらしいな」

藤太は横目でその方を見た。角刈りに加え、剃ることをしない太い眉。そのいでたちは図らずも生徒に恐怖を与え、その更生に絶大な効果を発揮するだろう。

体育教師は藤太を見ておらず、ただ憮然として立っている。が、その言葉が藤太に向けられているのは明白だった。

「俺じゃないです」立ち止まって藤太は答える。「亜貴のヤツです」

なるべく無関係を装った。無関係というか、被害者だというのが藤太の心にあった。

「じゃあ、その傷はなんだ？」体育教師は相変わらずに言う。

藤太は苦い顔をした。いま、藤太の右頬には三本の傷がある。

「猫に引っ掻かれました」

言ってからはにかんだ。

「そんな馬鹿デカい猫がいるのか」

「いたんですよね、それが」

藤太が言うことを信じたのか、それとも疑ったままなのか。体育教師は意地悪そうにひとつ鼻で笑うと、それっきり何も言ってこなくなった。藤太は首を捻りつつ頃合いを見計らうと生徒玄関へと向かった。

この間のうちに体育教師が藤太と目を合わせることはなかった。

この先生とは波長が合わないと藤太は思っている。授業を持たれていないことが救いだ、とも思った。

藤太の住む町は寂れた田舎だ。人口は七万人にも満たない。

そして通っている高校はありふれた県立高校である。指導方針として、自律、文武両道のふたつを謳っている。

そのうち自律に関しては飾りと言えるほど生徒の学校生活に介入してくる教師は多い。先の体育教師がよい例だ。服装から髪型、生活態度。公立校ならば当然の指導かもしれないが、それでも生徒からは不満である。さらに休日のカラオケボックスを巡回する教師もいるという。藤太は滅多に行かないが。さすがにやりすぎだろう。

そんな自律に対して、文武両道の方針は当たりと言ってよかった。文、つまり学問においては、優秀な進学校として県内で有名である。それに加え、武の方を表す部活動でも有名であった。私立高のように県外からの引き抜きをせず、県内の生え抜き生徒だけで全国と渡り歩く部も存在する。

といっても藤太には、少なくとも部活動の件は関係ない。藤太は帰宅部である。

ジャージ姿で生徒玄関をくぐる生徒がまばらにいる。朝練習をしていたのだろう。ほとんどは黒い制服だ。その中に交じって藤太も同様にそこをくぐった。

――ん？

と、藤太が眉を寄せたのは自分の靴箱を開けたときだった。ちょうど目の高さにある箱の中には、いつもは入っていないものが入っていた。

結論から言うと、それは白い洋封筒だった。藤太は上履きを取る前にそれに触れた。

ぺらりと薄い感触がする。

――なんだ、これ？

外見を見る限りでは何も書かれていない。誰が、何の目的で入れたのかはわからない。しかし手紙には間違いないようだった。蛍光灯に翳すと、便箋が一枚ほど入っているように透けて見えた。裏を返すと、ピンク色をしたハートのシールで封をしてある。

――ラブレター……？

あまりにシンプルな作りと、そのワンポイントのためにそれが頭をよぎった。

――だったら笑う。

しかし、その考えをを一蹴する。鼻で笑った。あるはずがないのだ。ラブレターを書く時代ではないし、何よりもらう柄ですらない。藤太は高校生活のほとんどをその蚊帳の外で過ごしていた。クラスでの影は薄い。そんな自分に、これはない。その笑いは自嘲を含んでいた。

藤太は制服のズボンにそれをしまうと、靴を履き替えて教室へと行った。

チャイムが鳴ったが、それはまだ始業のものではない。このチャイムで校門を超えていないと遅刻票というものを書かなければならない。

今ごろ外では体育教師の怒号が飛んでいることだろう。

藤太が席に着いていると、声をかけるものがいた。開こうとしていた便箋を素早く机に隠した。理由は藤太自身にもわからない。

「どうしたの？　その傷。……それとすごいクマだね」

藤太がいつもより倍増しの凶悪な目を向けて見ると、草地三晴だった。目と身体、ふたつの線が細い優男である。

藤太の機嫌を気にも留めず、三晴は質問を続ける。

「昨日、亜貴くんとまた『やった』って聞いたけど、そのときの？」

いったいどこから情報が漏れるのだろうと思ったが、それを訊き返すことはしなかった。どこからか漏れたのだろう。それだけだ。

隠しているつもりもない。漏れて困ることでもない。
関わっていないのだから。
「違う」藤太は首を横に振った。
「じゃあどうしたの？」
三晴は好奇心の旺盛な質である。それも自分に累が及ばない場合に遺憾なく発揮される性格をしている。しかし噂の発信源になることを目的としていないから、まだ個性として片付けられる範囲だった。
藤太は大きくため息をつく。先ほどの体育教師といい、よっぽど目立つということらしい。まだ自分で鏡を見ていないから、一度見た方がいいかもしれない。そう思った。
藤太は眉を寄せて、考えるように口を開いた。
「……猫がな」
「猫？」三晴は首を捻った。
藤太曰く、自宅の近所に一匹の猫が最近になって出るのだという。柄は茶色地に黒と白。毛の長さは極めて長く、風が吹けば鬱陶しいほどになびく。さらに右の目に三本の傷が斜めに走っていたりと特徴を挙げていけば数多くあるが、それらが印象に残らないほどに特筆すべきなのはそのサイズである。一般、または平均的な大きさの猫よりも二回り以上大きい。四本足で直立した場合、背の高さは藤太の膝までである。
「いや、それかなりデカいよね？」
三晴は両手で大きさを推察したり、藤太の足下を見て耳を疑った。藤太は決して大きい方ではないが、特筆するほど小さくもない。
「猫ジャナインジャナイ？」
藤太はそれに、わからないと答えた。
「でも見た目はまんま猫だから、猫には違いない……とは思う。たぶん」
「んー」信じられないが、どうでもいいという風の三晴だった。「それで？」

「風貌的に格好いいと思うだろ？　なんていうか、王者みたいで」
「え？　それは……そうかもねえ。三毛猫ならたぶん雌だろうけど」
藤太はその事実を知らなかったらしく、そうなのか、と意外そうに言った。だがそれはどうでもいいことでもあった。とにかく、と脱線しかかった話を戻す。
「なんていうか、お近づきになりたいってほどじゃないんだけど、関わりを持ってみたいっていう……わかるか？」
「わから……なくもないかな」
三晴は苦笑するとともに首を傾げた。
誰しも異端、異質なものに対して目が行ってしまうことはあるだろう。それが積極的か消極的かを問わず。三晴がわかるのはこのことで、そこから先はわからない。
関わろうとするかは別の問題だ。
「てことで」藤太は言う。「餌付けでもしようかとかねがね思ってたわけだな」
「ふんふん」
「今日、朝飯のおかずがメザシだったからさ、一匹残して、持っていったんだよ」
大猫は毎朝、近所の空き地にいる。そこは藤太が通学する道の途中にあった。
そこまで聞いて三晴は軽く笑った。
「その結果がそれなんだ」頬の傷を指さす。
藤太はいっそう憮然とするかと思いきや、吹っ切れたように声の調子を上げた。
「それがすっげえの」左手の甲を出した。そこにも同じような傷がある。「左手でメザシの尻尾持ってペシペシやってたんだけどさ、もうちょっとで咥えるってとこで手の甲引っ掻かれて、こっちが驚いてるうちに向こうはジャンプしてきてまた引っ掻いてくるんだよ」右頬をさする藤太。「で、こっちとしてはもっと驚くし痛いしで目をつぶってるうちに、メザシ盗ってどっか行っちまった」

藤太が目を瞑っている時間は三秒もなかった。大猫はそのわずかな時間に視界から完全に消失した。熟練の早業としか思えない。ぽつりと残された藤太は怒りも沸かず、ただ呆然とするしかなかった。

「なんていうか、藤太って本当……変わってる、っていうか馬鹿だよね」邪気なく三晴は笑った。

「うん？」

藤太が何か口に出そうとしたが、できなかった。

タイミング悪くチャイムが鳴ったのだ。

三晴は笑顔を湛えたままで自身の席へと戻っていった。

## 3

得意不得意を置いておくとして、藤太の嫌いな授業は三つある。英語と古典、それに倫理だ。幸いなことに、倫理は選択科目だったため取らずに済んだ。が、残りふたつは必修科目だから、単位取得は絶対だった。文理の別を問わず。

英語が嫌いなのはヒステリックな教師が多いからというのが理由だった。英語を教える人間はなぜか、男女問わず生徒への理解が乏しい気がしてならない。やけに高飛車な態度を取られるため、いつしか藤太は英語への興味を失っていた。捻くれ者と捉えるならば、合っている。

それに対し、古典教師は違う。人格を一言で言うなら、傾向として温和が多い。そして生徒への理解なら一番深いという印象を持っている。にも関わらず藤太が古典を嫌うのは、その独特の授業内容だった。

――眠い……。

努めなければ理解できない教科書。そして抑揚をつけた教師の喋りは、格好の睡眠導入プログラムになっている。呪文のように、積極的に睡眠へと貶める。

四限目に訪れた魔物は。

藤太はひときわ大きなあくびをした。

「こら守城」教壇の上から注意が飛んだ。「お前、宿題忘れて立たされてんのに、その上居眠りもするのか」

もちろん声の主は、この時間の統治者である古典教師である。名を安井という。四十中ごろの男性で、頭の髪はいつも風になびかれた後のように纏まりがない。気の抜けた声質とやる気のなさそうな目が特徴的だ。授業方針として、よく生徒を立たせる。

現に今、宿題を忘れた藤太が立たされていた。

「今度寝たら、チョークでも食うか？　あ？」安井が脅す。

その声はまったくと言っていいほど迫力がない。
「はっはっは」藤太は眠り眼で笑う。「立たされて寝るなんてできるわけがないですよ」
「ほう」安井は顎をさすった。「本当だな？」
じゃあ、と安井は目をかすかに光らせる。
「寝たらチョーク食わせるって言っても問題ないな？」
「ないですよ。まあ、寝ませんけどね」
「なら……これからずっと立たせるのもいいな」
「それはさすがに勘弁です」愛想を作って反対した。
だったら寝るなよ、と心のこもっていない檄を飛ばすと安井は授業を開始した。
藤太は安井の目標から外れると、それに安心して顔を伏せた。そして鼻から静かに息を吐くと、そのまま眠りに堕ちていった。
暗闇は底なしで、藤太自身にも食い止めることはできなかった。

その時間、夢を見た。舞台は砂場。どこの砂場なのかはわからない。背景は真っ白だ。
少女がひとりいた。年齢は園児にも満たないくらいだろうか。しゃがんでいる。砂を弄っているのだろう。声をかけようとした瞬間、藤太は自分もそのくらいの齢になっていることを自覚した。
それを不思議だとは思わなかった。
少女は何か言葉をかけてきたようだった。が、空気など存在しないかのように、藤太自身には何も知覚できなかった。それでも夢の中にいる藤太には伝わった。ひとつ首を縦に振ると、少女と同じく隣に座り、しばらく一緒に砂を弄っていた。
また少女が話しかける。相変わらず夢を見ている方の藤太には伝わらない。観客と演者、ふたつの人格が癒合しているようだった。演じている方の藤太はまたこくりと頷いた。
またそうやってふたりのやり取りが続いた。それは会話というよ

り、問答に近かった。口を開くのは少女だけで、藤太は首を横か縦のどちらかに振るだけだった。
――ああ、そういえば昔って割と無口だったよな。
観客である方の藤太はそんなことを思った。もっとも、その時分を懐かしむにはあまりにも記憶が上書きされてしまっている。自分の記憶には違いないが、どうも自覚がない。だからか、それくらいの感想しか浮かばなかった。
しかしそれでも、と思うことがないでもない。自分の年齢が下がっているということは、やはりこれは過去を見ていることになるだろう。ならば。
――こいつ、誰だ？
わずかにこの光景を訝しむ。
今幼き日の藤太と遊んでいる少女。蒼白と言っていいほどの肌の白さだが、そこに儚さはない。幼いながらも整った顔立ちは、はるか年上の異性までも虜にしてしまいそうなほどきれいだと感じる。
だがしかし、それほどはっきりと認識している姿がありながら、藤太自身には全く身に覚えのない少女だった。
急に不安へと駆られた。夢を演じている藤太の唇がわなないた。単にその不安が伝わっただけなのか、それとも観客の意思が流れているのか。おそらくは後者だ。
夢の中にいる幼い藤太は、夢の観察者である藤太自身の意識を以て唇を開いた。
――きみは、だれ？

「おれ？　安井」
夢の疑念を投げかけることはできなかった。
開いたのは現実の世界にいる藤太の目だった。蛍光灯に照らされた教室の風景が飛びこんでくる。舌には不快な苦みが走った。眩しさに細める目線を少し下げると手が見えた。その手を辿ると藤太の

唇に行きついた。手と唇の間にあるのは、チョークだった。
――寝たらチョーク……。
睡眠に落ちるほんの少し前、安井と交わした会話が思い出される。
安井は罰の悪そうな顔をして、そんな藤太と目を合わせた。
「まさか……」ため息混じりに言う。「寝言まで言うとはなぁ……」
「ええ……」藤太は目を細めて返す。「本当にびっくりです」
「じゃ、後はよろしく」
そのやり取りだけ済ますと、安井はさっさと教壇へと帰っていった。藤太の口に、白いチョークを残したまま。
――食え……ってか？
指でつまみ上げて全体を眺める。安井の捨て台詞からはそう読み取れる。上目遣いにその方を向くと、安井は邪気のない視線を藤太に投げかけていた。
深くため息を吐くと、藤太は結局決意を固めた。
――己の言ったことである……。
見た夢の内容は、強烈な苦みと粉っぽさにむせてすっかりと忘れてしまった。

## 4

『買い物おねがい。豚バラ、生姜、キャベツ、玉ねぎ。それらを好きなだけ。それからチョコレート。これはファミリーサイズをふたつ。種類は任せる。キャピキャピィ』

知恵からのメールだった。文面の最後が気持ち悪かった。

昼休み、口の中に残るチョークの後味を水道水で漱ぎ、席に着いて弁当の包みを広げようとしたところで、カバンに入れてある携帯電話が光っていることに気がついた。

ちなみに、藤太の通う高校は携帯電話の持ち込みを校則で禁止している。もっともそれを律儀に守る生徒はいない。

おそらくは今晩食卓に並ぶであろう、献立の買い出しだ。藤太はそう見切りをつけた。普段は知恵が仕事帰りに買って帰るのだが、ときどきこうして藤太に頼む。

――豚の生姜焼き。

材料だけでそれと察した。好きなだけ、とはつまり知恵と藤太の食べる分だけということだ。意味合いとしては藤太の食べる分だけ、という方が妥当である。女性の食べる分量は男性と比べると極端に少ない。ましてや藤太は、成長期を過ぎたとはいえ食べ盛りである。

そしてチョコレートとあるのは、知恵の夜食だろう。袋に詰められているものを買うのは知恵の常だった。

――好きなだけ……任せる、か。

メールの文面に書かれている単語を唱えた。藤太としては苦い記憶がある。

多少捻くれているところのある藤太は、委ねるというような言葉を、他人任せにする意味に捉えてしまうことがある。特に母親から委託された場合にこれがよく現れる。

今から三年ほど前、今回のように献立の材料を頼まれた。忘れもしない、カレーライスの材料だった。そのとき大変機嫌が悪かった

藤太は、適量分の二倍を買って帰った。分量はすべてカレー粉の外箱に書いてあるため、知恵は厳密に指定しなかった。藤太はその外箱を見たうえで、正確に二倍、買った。ここで叱ったり怒ったりするのが普通の母親だろうが、知恵は違う。意地を張ってそれを通した。その分量すべてを使い切ってカレーを作った。大鍋ふたつ分だった。カレー粉も二箱買っていたから、むしろそれだけで済んでよかったというものだ。ただ、藤太は母親とふたり暮らしである。

それから一週間、藤太はカレーライスを食べ続けた。まず朝カレー夜カレー。最終的に、早く片付けたい知恵は藤太の弁当にもカレーを詰め出した。そして昼カレー。

この三連コンボには藤太も閉口し、自身の一時に起こした過ちを最大級に後悔した。

他人から見れば似たもの母子として笑い話にもなろう。が、当事者には笑えない。

「あんた、今度からはちゃんと買ってきなさいよ。あたしも食い飽きたわ」

と、自分で作っておきながら、知恵は最後にこんなことを言った。

「それ、誰から？」

そのメール画面を思い出とともに睨んでいると、三晴が声をかけた。右手に購買で買ったパンをふたつ、左手にパックのジュースを持っている。藤太の机でそれを平らげるつもりのようだった。

「誰でもいいだろ」

身内から、とは言えない。そんな独特の恥ずかしさがあった。

「彼女は……」天井を見るように少し考える。「ないか」

そう結論付けて、三晴は藤太の前席から椅子を拝借した。

「うるさいぞ」藤太は携帯電話をポケットにしまった。

三晴は柔く笑うとパンの包装をひとつ破った。カレーパンのようだった。藤太の小さなトラウマを少しだけ掠る、そんなタイムリー

なメニューだった。
「さっきの時間は笑ったよ」三晴が微笑する。「むしろ若干引いた」
そう言って、三晴はカレーパンを一口かじる。
「まさか本当に食べちゃうんだもんね」
その言葉の後に藤太の弁当を見て、ああ今日もおいしそうなお弁当だな、と付け足した。
藤太は後の言葉には触れず、あれは虐待だと言った。
「ギャグで済ませておくもんだろ、普通。目が真剣なんだもんな」
未だ舌に残る苦みがとれない。藤太はまさに苦い顔をした。
「なら訴える？　教育委員会とかＰＴＡに」
藤太は箸を口に運んで、そこで止めた。三晴は細い目で微笑みを湛えている。
「まさか」
「だろうね」
三晴は予想していたように、満足そうに微笑んだ。
三晴ほど笑顔の種類に富んだ人間はいない、そう藤太は思っている。
「前に安井先生が言ってたんだけどね」そう語り出すのは三晴だ。
「世の中が潤っているかの判断基準って、選択の度合いなんだって。選択できる幅が広いってことは、それだけ物資が豊富だってことだから。でもそれはつまり、生きる難易度がその分上がるんだよね」
「……ん？」藤太は顔を突きだした。
何を言っているのかわからないのだ。
「その選択には注意が必要ってこと。カレーで例えるなら、甘口から始まって辛口まで、いっぱい辛さあるでしょ？　甘口しか食べれない人が辛口選んじゃったら大変っていうことなんじゃないかな。それに銘柄とかも」
「……はあ」呆ける藤太。
口が半分開いていて、実にしまらない。
それに三晴は苦笑する。

「先生が最後に言った結論を言うと、教師も生徒を選ぶ時代なんだ、だって」
「生徒が教師を選ぶっていうのは聞いたことあるけど、それはないな」
「指導方針の話だと思うよ、ここでの話は」
藤太は頭の中で三晴の話を整理し、何が言いたいのかを考えた。その結論が喉元で引っかかっているうちに、また三晴が口を開く。
「何が言いたいかっていうと、だれかれ構わずにあういうことする先生じゃないよ、ってことね。一応、部活を受け持ってもらっている身としての、安井先生の擁護」
「つまり俺なら何しても大丈夫ってことか」藤太はほんの少し不満を示した。
「むくれないむくれない」三晴は箸を振る。
それであやしているつもりらしい。
藤太は、むくれてないと言って、さらにむくれた。
「でも藤太、だいぶおとなしくなったよね」
「なにが？」
「チョークの件」三晴は笑う。「中学校のときだったら、前行ってぜんぶ食べてたんじゃない？」
「おまえは俺を怪獣にでもしたいのか？」

三晴がふたつめの袋を破る。出てきたのはサイケデリックな色合いのマーブルパンである。
「……気色悪い色だな、それ」
「そう？」三晴は不思議そうにパンを眺める。「おいしそうだと思うけど……。食べてみる？」
言って、差し出す。
「絶対にいらん！」
どんな味がするのか検討もつかない。

だが三晴が食べるのを見るに、そこそこ美味なようだった。
その三晴がそれを頬張りながら言う。
「ふぉおえぶぁふぁっきゅゆ」口がふさがっているため言えてない。
「フォーエバー……ファックユー？」
聞こえたまま、反芻してみせる藤太。
いや全然違う、とパンを飲み込んで三晴は言う。
「そういえばさっきね」微笑んだ。「亜貴くんに会ったよ」
それを聞いて藤太はご飯を噴き出しそうになる。それをなんとか堪えると、今度は気管に入ってむせた。
「ど……どこで？」涙目になって藤太は言う。
「購買のところ」
「……なんて？」
「んー」思い出すために三晴は上を向いた。「学校終わったらすぐ俺んとこ来いってさ」
「怒ってた？」
「うん、かなり」
「どれくらい？」
「いきなり胸ぐら掴まれて、耳元でそれをささやかれるくらい」
相当怒っているだろう。それを思い出したように伝える三晴もどうかしている。
藤太は大きくため息をついた。
「何したの？」首を傾けて三晴は訊く。
興味本位だろう。面倒ごとに首を突っ込むことはしないが、それでも執拗に訊きたがるのが三晴の性格だった。藤太と三晴は気の合うことが多いが、関わりを持つか持たないかの点で大きな違いがあった。どんなことがあろうと最終的に関わってしまうのが藤太である。星の巡りだろうか。
「朝、おまえがちょっと言ってただろ」憮然として藤太は答える。
「工業のやつらに絡まれたんだよ、昨日の夕方」
「うんうん」三晴は身を乗り出して聞く。この上なくいい笑顔だっ

た。「それでそれで？」
野次馬根性というのだろうか。対岸の火事だからこそできる楽しみがある。
「面倒くせえから、速攻で逃げた」
「……それだけ？」それが不満であるかのような三晴だった。
「俺は、な」
「ああ……亜貴くんを置いて逃げたってわけ」それは怒る、と三晴は納得した。「ひどいことするなぁ」
「さっき会ったとき……」藤太は弁解するようにゆっくりと口を動かした。
「え？　うん」
「怪我とかしてた？　あいつ」
「見たところは特に……うん、何も」
三晴が会ったとき亜貴の体に傷、打撲痕は見当たらず、ただ怒気だけがあったという。
それを聞いて藤太は鼻から息を吐いた。うんざりするほど予想できたことだった。
「昨日あいつが相手した人数、三十三人」藤太は両手を開いて前に出す。「ちなみに全員が武器持ちな。想像してみろ、そんな修羅場にいれるかよ。しかもそれをひとりで倒し切っちまうやつと一緒に」
その傍はたしかに安全だろう。しかしそこに安全を求めること自体が間違っている。
「まあ……巻き込まれたくはないよね」三晴は苦笑する。
藤太も同じように苦い顔をしたが、その心根は違った。言ったことは嘘ではないが、事が起こったその過程を話していない。
「三十三人かぁ」
三晴は風の吹く荒野を想像する。砂塵が舞い、相手は腰にピストルを装備したカウボーイである。それが三十三人居並ぶ光景を、たったひとりで蹂躙していく男。その場に響く高笑いは悪魔の所業にふさわしい。

ここは日本だ、と突っ込める人間はいない。すべては脳内で作られたイメージだ。
「それをひとりで……ねえ。相変わらずすごいね、亜貴くん。あんなにかわいいのに」
「それ、本人の前で言ってみ？」藤太は笑わず、上目遣いに三晴を見据えた。
言ってみろ、と命令しているようだった。
「おもしろいことになるから」
「絶対にいやだ」無邪気に三晴は笑った。「まだ死にたくない」
本人を前に、かわいい等の言葉は禁句だった。言ってみればその呼び方は一種の陰口でもある。ずいぶんとポジティブな陰口だった。
「それにしても」三晴は不思議そうに言った。「せっかく学校きてるんだから自分で言えばいいのに」
パンをふたつとも食べきり、今はジュースで昼食を締めている段階だ。
「まあ、あいつも退学は怖いってことじゃないかな」藤太は他人事のように返す。
「どういうこと？」
「怒ってたんだろ？　亜貴のヤツ」
「うん、尋常じゃなく。胸ぐら掴まれたもん、ぼく」
その事実に、藤太が軽く謝ると、三晴はむしろ興奮したからいい、と爽やかに笑った。
変態だろうか。ときどき藤太は三晴のことを疑う。
「それほど怒ってるってことは」藤太は話を戻す。「見境がなくなってるんだろ。俺なんか見ちゃったらそれこそ、な。校内で暴力沙汰はさすがにまずいって最後の自制が働いたんだろ」
「えーっと、その暴力沙汰の加害者は亜貴くん」自然と茶化せなくなった。「そして被害者はつまり……」
「俺」
藤太も弁当に残った最後の一口を食べきった。

「……行くの？」冷や汗をかきながら三晴は笑う。
まるで自分が殴られるような狼狽ぶりだった。実際に殴られる危機に瀕している藤太とは実に対称的だった。
行けばおそらく殴られることは確実になるだろう。
「行くべきか行かざるべきか、それが問題だ」神妙に藤太は腕を組む。
それがいかにも演じているかように見える。
「どうするの？」
「どうするか……」上体を反らして天井を仰いだ。
真上にある蛍光灯は寿命のようだった。わずかな音を連発させてちらついている。
それを見ているうちにあることを思い出した。
緩慢な動作でもとに戻って、藤太は口を開く。
「そんなことよりも」亜貴の件が大した問題でもないかのように言う。「西崎篠乃って知ってる？」
「え？」
唐突に関係のない話を振られて三晴は呆然となった。
「……知らないよ？」
「だよなあ」
そう言って藤太は腕を後頭部で組んでまた天井を見る。
「え……と、だれ？」
「俺も知らねえんだよ」
藤太は限界まで体を反らし、喉奥から呻くような声をひねり出した。

## 5

放課を知らせるチャイムがなった。

藤太のクラスはおよそ七割の生徒が何かしらの部活動に所属している。その生徒らはみな足早に教室を去った。

三晴も吹奏楽部の部室へと向かった。その行きしな、「じゃあ、気をつけてね」と藤太にこんな言葉を投げかけたが顔は笑っていた。昼のときのように心配している風ではない。むしろ野次馬な心境だったろう。

もっともどんな顔をされたところで、藤太は当事者のくせに他人事だった。亜貴の命令に従うつもりは毛頭ないからである。わざわざ死にに行く、もとい殴られに行くほどお人好しでも、馬鹿でもない。

帰宅部と通称される生徒たちは少しの間教室でたむろしていたがそれも大方が出て行った。藤太はもう少しいることにした。まだ生徒玄関付近は人混みができているだろうから、それを避けるためだった。手には一枚の手紙が広げられている。朝、下駄箱に入っていたものだった。

『守城藤太さま。

お久しぶりです、西崎篠乃です。

約束の月日より四年も遅くなってしまいました。お待たせして本当にごめんなさい。

ようやく死神となる準備が整いましたので、思い出の公園にて本日午後四時三十分にお待ちしてます。

そこで約束を果たしましょう。

西崎篠乃』

何度か読み終え、そして今一度通し読みしてから藤太は頭をかいた。小さく唸りもした。
――まったく憶えがない。
窓からは日が斜めに入り、教室を朱に染めている。周囲を見渡すと藤太ひとりになっていた。運動部員の上げる声が木霊して聞こえてくる。そして藤太はもう一度小さく唸った。
――西崎篠乃。約束、四年遅く、お待たせ。準備、整う。思い出の公園。
キーとなる単語を挙げていくが、何ひとつ記憶の琴線に触れない。四年遅くなったところで、藤太は何も待っていない。実際に会って、そして口で思わせぶりな態度をとられたなら興味も湧こうが、それもない。
――死神になる準備。
そしてそれを見ただけでうんざりとした。何を言っているのかわからない。
それでも藤太が一日悩む羽目になったのは、手紙の頭にもっとも身近な単語が書かれていたからだ。
――守城藤太。
俺の名前。藤太は心の中でつぶやく。人違いでないことはたしかなようだった。
――本日四時三十分。お待ちしてます。
行くべきかと藤太はまたしても頭をかいた。その方がいいのだ、とは思っている。西崎篠乃という人物が誰であろうと、時間指定をして待っていると書いてあるのだからそうなのだろう。
「んー」
――西崎篠乃。
藤太は文面の末に注視する。
この学校の生徒だろうかという推察があった。手紙のあった場所は玄関。入り口とはいえ学校の敷地内、まして校舎には違いない。

そこに進入したということは、可能性は極めて高い。日中、教室を巡回して生徒の出席簿を見て回ろうか、ということを考えたこともあった。が、それを実行に移すことはなかった。第一に面倒くさい。それに、行けばわかることだから。

そして、行かないとひとつ決心をすればすべてが解決してしまう。

――帰るか。

藤太は誰もいなくなった教室を去った。

すぐには帰らない。藤太には寄るところがあった。昼休みに知恵からメールされた買い出しを行わねばならない。

金額は足りるだろうか、と財布を確認するとなぜか一万円札が増えていた。

覚えはないが心当たりはある。知恵だろう。藤太はそう見当をつける。

――ここまで用意周到なら、朝に口で言えばいいのに。

私物を勝手に覗かれたことに口を閉ざす。

メールで伝えるというまどろっこしさもあった。

これをした理由はおそらく、買い物に藤太を使うと、それを決めたはいいが献立を決めかねたからだろう。職場にて熟考のすえ決定し、そうして買い出しの内容をメールにした。そんなところかと藤太は思った。

「本当、いいように使われてるな」携帯電話のメールを確認する。

漠然とした不満を胸に、藤太は夕暮れの町を歩いた。

## 6

梅雨が明けて、暑さに拍車がかかった気がする。学校にいるときはクーラーのために存外涼しい。しかし一歩外に出れば、日も落ちかかっているというのに肌を伝う汗は尋常ではなかった。

そんな中、一度見つけたオアシスは手放すに惜しい。十分もあれば事足りるというのに、藤太はスーパーマーケット内を一時間もふらついた。そこを出る頃にはちょうど夕日が山際に触れようかというところだった。

停滞を続ける熱気を感じながら、その輝きに目を細めた。

それから十分経ったころ、藤太は汗を滝にして走っていた。立ち止まることはできそうにない。ビニール袋が右手の動きに合わせて鳴り続ける。藤太は振り返って距離を測る。

追ってくる者がいる。人数はふたり。そのうちのひとりが巻き舌で怒号する。

「どらぁ！　逃げんじゃねぇぞ！」

世間一般的にいう、不良高校生だった。ブレザーの制服なので工業高校の生徒と知れる。藤太と亜貴が昨日悶着を起こした相手だった。

片方の髪型はアフロ。空気抵抗がこれでもかというほどに働いている。

そしてもうひとりはこれでもかというほどのリーゼントだった。アフロとは対称的に、えらく走りやすそうだった。

それらの髪型だけで時代錯誤を感じる。不良の中でも間違いなく希少種だろう。そんなふたりに追いかけられるというのは貴重な体験と言えるのかもしれない。

藤太にしてみればうれしいことではないが。

とにかく、藤太は逃げている。一心不乱に逃げている。

不良の腕っ節の太さは藤太と比べるべくもない。追いつかれれば

相応な災難が待っているだろう。藤太は痛いことが嫌いだった。
「だから！　待てって！　言ってんだろうが！」リーゼント頭が走りながら叫ぶ。
藤太と不良ふたりの距離は一向に開かない。それでもまったく縮まりもしない。
ビニール袋と通学鞄を抱えて走る藤太に対し、向こうは何も持っていない。不良の身体能力が低いのか、藤太の逃げ足が速いのか。どちらにせよ、藤太は不良を撒かなければ家には帰れない。自分の家を突きとめられるわけにはいかなかった。
――亜貴のせいだ。
藤太は苦い思いを馳せる。亜貴に負かされたから、俺に降りかかるのだ。
「俺、関係ねえって」藤太は振り返って言葉を投げる。「悪いのは亜貴だろ？」
「てめぇが一番悪いんだろうが！」今度はアフロが言い返した。
鼻の高くない小太りで、汗は油のように粘っこく見えた。
「この嘘吐き糞野郎！」豚野郎が怒鳴る。
「しょうがなかったんだよ」
「何がしょうがなかっただ！　ああ？」リーゼントの方がまた怒鳴る。
目元が幼く、愛嬌のある顔だった。体も小さい。
ふたりの不良。会話を合わせる息は、これ以上ないくらいに合致している。
「だって俺、痛いの嫌いだし」
「知ったことか！」
コミュニケーションを図ったところで不良はぶれなかった。速度を変えずに追っかけてくる。もとより、不良という人種の強さは単純明快なまでに、考えない思考にある。一度考えを決めたなら、それを揺るがすこと、または改めさせることは難しい。
説得は無理だと藤太は判断した。このまま逃げるしかないのだろ

う。昨日と同じように、口先で逃れる手段は使えそうになかった。
「だあくそっ！」
藤太は自分に毒づいて走り続けた。
その付かず離れずの均衡は徐々に破られつつある。不利は藤太にあった。荷物の有無がそれをわける。
長期的に見て、その差は持久力に大きく作用する。何も持たない不良に比べて、藤太の体力が消耗する速度は激しかった。息が上がっているのは不良と藤太、どちらも変わらない。しかしその程度は藤太が上をいく。走る速度も落ちてきた。
そんな藤太に追い打ちをかけることが起こる。振り向くと、不良の数が何人か増えていた。特徴的な髪型ではなかったが、眉毛がなかったりと一目で仲間だとわかる。勢いや迫力は人数が増えた分、増長して見える。
――なんでだ？
藤太は思うが、少し考えればわかることだ。不良は偶然藤太と出くわしたわけではなく、始めから藤太を捜していたのだ。それも大多数を使って。その捜索網にかかったのだから、あとは糸を辿る蜘蛛の子のように群がってくるのは道理だった。グループの情報伝達能力は甘く見れるものではない。
振り切ることは不可能に近くなった。
――全部亜貴のせいだ！
藤太は心で連呼しながら走った。河野亜貴が強すぎてとばっちりが来ているのか、昨日騒動を起こした不良たちの全員を病院送りにしていないからなのか。
とにかく藤太はいまの現状を理不尽に感じていて、それをすべて亜貴になすり付けたい思いでいっぱいだった。
藤太は走る。背に幾人も引き連れて。買い物袋を引っ提げて。
不良の数は十人に迫ろうかとしていた。

## 7

その逃走劇は唐突に終焉する。
藤太は住宅街の路地裏へと逃げ込むと、そこで致命的な失策を冒した。袋小路へと踏み込んでしまったのだ。
藤太はその危機に力なく笑う。
藤太の前には見上げるばかりの塀が行く手を阻んでいる。藤太の目測にして、二メートル半といったところか。自らの家を特定されないようにと、慣れていない方角に逃げたのが仇となった。
――やっちった……。
すぐに引き返そうにも背後から足音が届く。まばらだったが数は多い。
ゆっくりと藤太は振り向いた。
血走った眼をして狂気に笑う不良が十数人ほど、藤太の退路をふさいでいる。必死の体がうかがえた。不良にしても、メンツにかけて藤太を逃がすという失態を許せないものがあるのだろう。プライドとしては実に矮小なものになる。
しかしそれを馬鹿にして笑うことはできない。そのために藤太はこうして袋叩きに遭う運命に行き着いたのだ。いま仮に笑ったとして、それは挑発以外の何物でもない。
「てめぇ……」眉毛のない不良が言う。「足、速すぎんだよ」
肩で息をしている。汗が目に入り、邪魔そうだった。
最初から走り通しだったリーゼントとアフロ頭のふたりは集団の一番後ろにいた。ふたりとも顔を青くして、懸命に嘔吐を我慢しているようだった。突発的な重度の運動によるショック症状を引き起こしている。そしていま、同時にふたりは倒れた。
藤太は汗を滴らせて疲労も困憊しているが、ショックにはなっていない。
「いやいや、そっちもなかなか」ちらりと藤太は後ろの塀をみた。

立ち止まらずに走っていれば、勢いで登れそうだった。時間にすれば三秒もかからなかっただろう。いまの状態から同じことをするならば、十秒は確実に要する。

――無理だな。

藤太は舌打ちした。

「なんだ？　ああ？」その舌打ちに過敏に反応する不良。

「何でもない何でもない！」一挙手一投足すべてに突っかかられる。大変だ。

「とりあえずチョコでも食べようぜ？」ご機嫌でも取ろうと考えた。

「なんか、落ち着く効果とかあるらしいけど」

そう言って袋から取りだそうとしたが、袋ごと横取りされる。そんなにほしいのかと驚いたが、それは違った。

「いらねえんだよ」

囲っている塀の向こうへ投げ入れられた。

バサリという音が聞こえた。

「とにかくだ」眉毛のない不良が話を始める。これがリーダー格のようだった。「てめぇのせいでオレらの半分は病院の世話になってんだ。憶えてるよな？　昨日のことだもんな」

毛穴が見えるところまで藤太に顔を近づける。

藤太は顔を逸らして黙っている。

不良は続けた。

「嘘まで吐いてオレらをけしかけてよぉ、そんでいざ戦争ってなったら一番に逃げ出しやがって」

たったひとりを相手に回して、それを戦争という。残念ながらニュアンスは合っている。

「いやだって……俺のこと祭り上げたのはそっちだろ？」

「アレは妹が亜貴の人質になってるっつう、てめぇの嘘が始まりだろうが！」

「仕方なかったんだよ」藤太は手を挙げた。「俺、痛いの嫌いだし……」

「何言ってんだ？」
「もとはといえば、はじめ俺に絡んできたのはそっちだ」
「まあそうだな」眉ナシは頷く。「でもそれはよ、おまえに人質になって貰うっていう目的がちゃんとあってだな」
「だからなんだよ、その人質って！　そうしないと亜貴に勝てないのかよ！」
「勝てねえんだよ！」
それを言われてしまっては藤太は黙るしかない。
「だからって」それでも納得できないことがある。「なんで、それで俺はボコられることになるんだよ」
「その方が緊張感出るだろうが。人質ぃって感じ出まくるだろうが！」
「出せるさ！　演技派舐めんなよ？」
「ほう」眉ナシの不良は意味深な感嘆を漏らした。「だったら、いまここでやってみろよ、演技派」
「……何を？」
「人質の演技だよ。できるんだろ？　今日もこれから亜貴んとこ行くからよ、結局てめぇは人質なんだわ」
「……無駄」藤太は微かに笑う。
「なんか言ったか？」
「いや何も」
「じゃあやれよ。人質の役な。できなかったらボコるから」
ときに、無茶ぶりにだって答えなければならない。
藤太はしばし思案する。設定は悪の組織に捉えられたヒロイン。ヒーローは亜貴だ。いろいろと不本意だがやるしかない。そうして藤太はヒロインになりきるのだった。
「ア……アキー！　ヘルプ、ヘルプミー！」裏声だった。
場が一瞬にして凍り付く。
自分でも気持ち悪いと自覚した。そのときが自らに敗北した瞬間だ。

藤太は襟元を掴まれる。
――全部が全部、亜貴のせいだ。
藤太は観念した。考えてみれば誰に殴られるのかという違いしかない。むしろ亜貴に殴られる心配がなくなったのだから僥倖と言えるかもしれない。
眉のない不良が拳を固める。一発目を打つらしい。
大きく固めた拳を後ろ身に反らす。完璧なテレフォンパンチだ。威力は高いが、予備動作が長い。そのため基本的には当たらない。しかしいまはそれが当たる。藤太の身動きができないからだ。
殴られるに対してその反射で藤太は眼を瞑った。
覚悟を決めると、体感する時間の流れは緩やかになるらしい。だからだろうか、藤太は殴られる瞬間がくるのをやけに長く感じた。まだか、とそう思った。
風が吹き、そして止んだ。夏だが冷たく、そして乾いた風だった。
止んだころ、さすがに長すぎだろうと眼を開けた。
その眼が捉えた光景は衝撃を以て藤太を出迎える。
その場にいた不良たちはみな、昏倒したように倒れていた。全員、すでに意識がない。藤太を殴ろうとしていた眉ナシもちょうど倒れるところだった。藤太の呼吸が楽になる。
そしてその中央には、藤太と同じ年齢だろうか。少女がひとりだけ、藤太に背を向けて立っている。そよがせる髪は長い。衣替えも終わっただろうに、着用しているのはセーラー服だった。それがゆっくりと振り向いた。涼しげな流し目。夕焼けに照らされた景色の中で、彼女の黒は一層際立って見えた。
「やっと見つけた」
その少女は言ってから微笑む。実に安堵した声だった。小声だったが聞き取れた。
それは美人だったからというのもあるだろう。西洋の血が混じっているかもしれない、そんな、鼻が少しだけ高い整った顔立ち。蒼白と言えるまでに透き通る白い肌は、しかし虚弱とはほど遠い。十

人が十人、振り向いてしまうほどの美形だった。
だというのに、そんなことは些細な問題に過ぎなかった。
何より藤太は、身の危険を感じたからこそ注視しなければならなかった。
藤太の目の前にいる少女は、その身の丈ほどもある大きな鎌を携えていた。それが朱色の夕日を鈍色に変えて反射させる。十人いた不良全員が倒れている現状で、それは生々しすぎた。
「藤太くん」
にも関わらず、少女の微笑みはそれとかけ離れて可愛くもある。
思考能力がとろつく。
「え……と、だれ……だっけ？」
藤太はただ呆けることしかできず、ようやくその言葉を口にした。

# 1

時刻は午後四時三十分。空は今のところまだすみれ色だが、直に夕日が朱に染め上げるだろう。人の影も徐々に長くなってきた。

西崎篠乃は逸る気持ちを抑えながら待っていた。手持ち無沙汰に一羽のカラスに餌をやっているが、しかしどうも落ち着かない。自前の腕時計にて時刻を確認する。約束の時刻になったが、それらしい人影は認められなかった。

そこは守城藤太に別れを告げた公園。そして約束を立てたところでもある。

公園という名前を冠しているが、実際は何もない。遊具や水道、公衆トイレ、それらはすべて昔からなかった。そして現在もありはしない。ただ砂場だけがある。そのすぐ横には桜の木。いまの季節は青い葉が繁っている。よく虫が湧き、砂場の使用を控えるようにと警告文が張られていたのを篠乃は思い出した。

――懐かしい。

自然と笑みがこぼれた。

小学校の低学年くらいであろう子供たちが遊んでいるのを眺めた。おにごっこを大人数でしているようだった。逃げている方が砂利に滑って転び、泣いてしまった。ゲームは中断し、他のみながその許へ集う。篠乃はその微笑ましさに顔を綻ばせた。。

夢のようだとも思う。まさかもう一度ここに帰ってこられるなんて、と。

しかしその甲斐甲斐しい思いは、いつしか言いしれない焦燥へと変わる。

三十分が経っても一向に守城藤太は姿を見せないでいた。遊んでいた子供はそのほとんどが家に帰ってしまう。

それからさらに三十分、手紙に書いた時刻から一時間経ったころ。もう公園には誰ひとり残っていない。いや、残っている最後のひと

りが篠乃だった。ずっと傍らにいたカラスも、仲間に呼ばれて飛び立ってしまった。篠乃の心は狼狽を通り越して苛立ちへと変わっていった。そしてそれは、明確な怒りへと変貌を遂げる。

――すっぽかされた！

わなわなと全身に力が入る。その力で地面を大きく踏みならす。道行く大人が向ける怪訝な視線も気にならない。

顔が紅いのは夕日のせい、だけではないだろう。

――ありえない！

そう。ありえることではなかった。篠乃にしてみれば、あのとき交わした約束は絶対だった。

こんな心境のとき人はなんと言うのだろうと、言葉を探した。

――ドちくしょう！　だ。

そして当て嵌まったのがこれだった。およそ紳士淑女が決して口に出さない種類の言葉だ。これが頭にひらめいたとき、篠乃はこのあまりのふさわしさに少しだけすっきりしてしまった。なぜかそれが悔しくなる。

ともあれ、藤太は来ない。その事実にある程度やきもきした後、篠乃は鼻を鳴らして歩き出した。

来ないのなら、こちらから出向いてやる。

そんなポジティブさを篠乃は持っていた。

始めに向かったのは藤太の実家である。その公園から五分とかからない。道順はいまでも生々しいほどに憶えていた。わずかな道のりの末、十四年前と変わらずに家は建っていた。表札には『守城』とたしかに書いてある。

間違いなく、守城藤太が住んでいる家だった。

が、篠乃はその家を前にして眉を寄せる。もう明かりが灯っていてもいい刻限なのに、窓が暗いままなのだ。

――いないの？

そう思ってチャイムを押した。しかし音が中から響いてくるばかりで人の気配はない。父親も母親も、まだ帰ってきていないらしい。
――いないのか。
だったら、と篠乃はさっさと踵を返す。
――捜すだけ。
一度決めれば、もう止まらない。

実際捜すことを決意すると、存外あっさりと見つかることとなる。
歩き始めてしばらくすると、慌ただしい気配が町にあることに気がついた。規模としては数人程度の小さなものだが、大きな速度で動いている。藤太を捜すといっても、その当てのない篠乃はとりあえずその方へ行ってみることにしたのだ。逢えると、根拠もない予感がそうさせた。
そして気配の正体に追いついてみて、篠乃はその思惑が的中したことを悟った。
十四年の成長も関係ない。ひと目でわかった。守城藤太がそこにいた。
――やっぱり……運命？
篠乃は歓喜し、高揚した。
しかしそれは一瞬に邪険な目へと変わる。それは藤太ではなく、藤太を取り巻く状況に向けられている。
藤太は見るからに不良然としたものたちに壁際へと追いやられていた。胸ぐらまで掴まれている。どう見ても安穏とは言いがたい。すぐさま再会を喜べるような状況ではない。
だが違った喜びをもたらした。
――すっぽかされたわけじゃなかったんだ！
藤太を囲んでいる不良たちは、篠乃にとって邪魔者以外の何者でもなかった。
だが、その危機を脱することは篠乃にしてみれば造作もない。身

の丈に及ぶ大鎌を、手許へと静かに出現させると篠乃は走った。
――邪魔者は排除すればいい。
目的を第一に考えた場合、篠乃の頭にはこれがある。
早く話をしたいと気持ちが逸る。
疾走の余波で生じる風は不気味に冷たい。
それが止むころには、篠乃はそこにいる不良全員を昏倒させていた。具体的に何をしたのか、余人にはわからない。
篠乃は振り返って藤太を見た。
懐かしさと再会の念願が叶って思わず笑みがこぼれる。
「やっと見つけた」いや、やっと逢えたと言った方が正しいか。「藤太くん」
名前を呼ぶと、さらに実感が増す。
――ああ、目の前に、たしかにいる。
だが、眼前に呆ける藤太は、篠乃にしてみれば信じられない言葉を発した。
「え……と、だれ……だっけ？」
篠乃は一瞬、暗黒に視界を覆われた。

## 2

篠乃の狼狽は態度にも表れた。先ほどまでの涼しげな表情は見る影もない。左手でこめかみを押さえ、下を向く。一歩だけだがよろめきもした。視界に入った自分の膝はわずかばかり震えて見えた。

再び藤太を見つめる瞳は何か悲壮なものを見るようだった。

「守城……藤太くん、よね？」確認を取る。

「あ、ああ」藤太は曖昧ながらも頷いた。

「西崎篠乃なんだけど、憶えてない？」憶えていてほしいという悲痛な願いがある。

「あ、ああ！」藤太は目を丸くして篠乃を指す。「お前か！」

篠乃はそれに歓喜の色を以て応える。

「思い出してくれた？」

しかしその期待は裏切られる。

「あの手紙、出したのは」藤太は言った。

――完全に忘れてる……。

篠乃は絶望した。深い闇の中へと屠られる思いだった。それでも、意識が奈落へと急落下していくのを懸命に堪えた。

「昔、家が隣で、一緒によく遊んだんだけど……」

一縷の希望。それにすがる。

篠乃は藤太の家を訪ねた際、あえて見ようとしなかったものがあった。自分の生家である。外見は変わらず残っていたものの、表札は西崎となっていなかった。十四年の歳月は生来の土地をほとんど別の土地に変えていた。いまこの土地で篠乃が知っているのは、守城家の人間しかいない。

なんとかして、思い出してほしかった。その思いは切実だ。

「昔……っていつ？」

「十四年前。三歳まで」

「引っ越した？」

「うん」
そこまで訊くと藤太は難しい顔をした。
「そんなヤツ、いたか？」つぶやく。
――そんなヤツ。
藤太の吐く何気ない一言一言が篠乃を深く傷つける。藤太と篠乃は、まるで他人だった。もうだめだと篠乃は思った。
――絶対に忘れてる。
篠乃の実感と母親の言葉が心の中で被さった。篠乃は母親にそう言われたときのことを思い出した。そのときは勢いで強く否定した。しかし少し冷静になると、それは心配事として篠乃の胸にへばりついた。
――もしも憶えていてなかったら。
そんな危惧があったからこそ、篠乃は藤太の通う学校を調べ上げ、そして下駄箱に手紙を置いておくという回りくどいアプローチを試みたのだ。手紙には無意識に働きかけるまじないを添えてあった。忘れているなら思い出せるように、と。
しかしそれも、無駄だった。
約束だって忘れているだろう。
篠乃は天を仰いだ。無常を悟る。心境は虚しさで充ち満ちていた。強く握りしめた拳を脱力し、大きくため息を吐いた。そしてもう一度藤太を見るその瞳はいつも通りの涼しさを取り戻していた。
むしろ冷気さえ漂わせる。
「うん、むかし、キミと隣通しで、よく遊んだの。そして引っ越すときね」篠乃はひっそりと言葉を紡ぐ。「約束したの」
「おお、それ。それ気になってた」
静かな篠乃と対称的に、藤太の語感は高くなった。つっかかりがとれる思いなのだろう。
「私たちが大きくなったら、藤太くん……」
「うん？」
「キミの命を貰うって」

「……は？」
言葉を理解できずに口を開ける藤太に篠乃は無表情を貫いた。そして、手に提げた大鎌を見せつけるようにして肩に担ぐ。
それは死神の力の象徴。輝きはいつも変わらず鈍色を放つ。その色はかつて公家の用いる喪服をなし、そして冷たい金属の輝きははっきりとした情けのなさを漂わせる。死別に悲しむ人の魂を冥界へと送り届ける死神にこそふさわしい。
いまこの瞬間において篠乃は、死神の風格を完全なまでに漂わせていた。
「私ね、死神なの」

## 3

その言葉を聞いた藤太の表情はみるみるうちに変化していった。それは驚愕でも畏敬の念でもない。怪訝、そのものだった。
「シニ……シニガァ……なんだって？」若干右耳を向ける。
「死神よ」篠乃は冷静に繰り返して言った。「手紙にも書いてあったでしょ？　それにこれ、目に入らない？」
そう言って担いでいる大鎌を振るように動かした。
藤太はますます怪訝な顔を深める。
「死神？」藤太が訊く。
「そう」篠乃は肯定する。
「ダレが？」
「私が」
「そういう……設定？　脳内の」
「そんなわけないじゃない」
「本物？」
「当たり前よ」
「本当に？」
「これ」篠乃は再び大鎌を誇示する。「それと強いて言うなら、この状況？」
篠乃の足許には、いまも昏倒させられたままの不良たちが転がっている。ごく普通の女子ならば、こんなことは不可能だ。
「が、一応の証拠かな」
「じゃあこっちも一応」訝しむ藤太。「……おまえ、男だったりしねえ？」
まったく予想していない質問に、篠乃は藤太の真意を察しかねた。
「そんなわけないじゃない！」質問を理解すると、篠乃は怒った。
反応を見て藤太は、さすがにそれはないよな、と眉を寄せる。
なんのことか篠乃はわからないばかりだったが、深く訊き返そう

とは思わなかった。
次に気になることがらへと藤太は質問を移す。
「死んでる……のか？」
篠乃は頭を振った。
「死んでない。邪魔だったから、眠らせただけ」
「よくわからんけど、おまえ催眠術師なのか？」
藤太にしてみれば、そっちの方がより現実に沿っているのだろう。眠らせたという単語がそれを想起させたに違いない。
「あのね……」苛立ちを見せる篠乃。「死神だっての……」
呟く。
なんと言っていいのかわからなくなった。先ほどから、まるで話がかみ合わない。
「とにかく私は死神で」篠乃は言う。「キミと小さいときに、キミの命を貰い受けるって約束したの！」
それだけが、篠乃にとっての大事である。このために来たのだ。
「俺が？」藤太は人差し指で、自身とそれから篠乃を順に指す。「あんたと？」
篠乃は無言で頷いた。
「憶えてねえ」藤太は無愛想に頭を掻いた。「ていうか、そんな約束」息を吸って間を溜める。「してたまるか！」
怒った、というよりも突っ込みを入れたという表現に近い怒声だった。
「いや、これからするんじゃなくてとっくの昔にしてるのよ？」
「そうじゃなくて！　そんな約束、俺は絶対にしていないって意味だよ！」
ピクリと篠乃の眉が動いた。
「したわよ！」
「してねえって！」怒鳴り合う。「そこまで言うなら約束したっていう証拠くらい出せっての！」
――証拠。

篠乃は唇を噛む。ないのだ。子供のころは口約束がすべてだった。紙などの媒体を使って、証拠を残してあるはずがない。それは篠乃の持つ思い出の中にある。それがどんなにたしかな光景で美しかろうが、どうしたって現実の世界に持ち出すことはできない。

そのもどかしさ、そして悔しさを篠乃は攻撃へと変えた。肩に担いだ死神の鎌を藤太の首筋に向かって一閃する。

「したのよ」

刃は皮膚を斬りつける寸でのところでピタリと止まった。

急なことで藤太は棒立ちのまま鎌の軌道を見送ることとなり、ようやく自覚したころには驚いてその場にへたり込んでしまった。

そんな藤太を篠乃は見下す。かつての友を見る視線はなく、そして仇敵と認めるものでもない。虫けらを見る目になっていた。再び鎌の刃先を藤太に突きつけて篠乃は言った。

「約束はした。これは事実。私は憶えてる。憶えてなかったそっちが悪い。約束は絶対」篠乃の発言は単調かつ事務的になっていた。

「だから、いまここで」

――私のために死になさい。

そう言い放った。

その後に起こった静寂は、最後の言葉をふたりの間に停滞させた。

「大丈夫。協力してくれるなら痛くしないし、すぐに終わる。だから、ちょっと死んでくれるだけでいいの」

藤太からの反応がないので、篠乃は補足を始める。それにしたって感情は見えず、相変わらず事務的と言っていいほどの抑揚のなさだった。

藤太は俯いてカタカタと歯を鳴らした。その震えは全身に伝播し、体中を戦慄かせた。

恐怖しているのだろうと篠乃は思った。

藤太は震える手で突き出された大鎌を体の前から除ける。

「ちょっとってなんだよ」震える声で藤太は言う。「死んだら、また生き返られてくれるのか？」

藤太が再び顔を上げるとき、篠乃と藤太の視線が交わった。その藤太の瞳を見たとき、篠乃は考えを改めることとなった。
――怒っている。
そう篠乃は感じた。しかしそれは、割とどうでもいい。
「そんなわけないじゃない」篠乃の感情は変わらない。「死んだら終わり。それまでよ」
「ふざけるな！」
藤太の怒号は夕暮れに残響する。
声の大きさに篠乃は驚く。
「そんな簡単に自分の命やれるかよ！　いきなり現れてなんだ？　なんか、いろいろとふざけるなってんだ」
藤太はようやく立ち上がる動作に入った。
それを見届けながら篠乃は言葉を浴びせる。
「私はふざけてないし、いきなりでもない。さっきも言ったけど、忘れてたキミが」
「だから！」最後まで言う前に藤太が言い阻んだ。「そんな約束した憶えなんてないし、おまえのことも知らねえ。第一、『死ね』って言われて『そうですか』って死ねるかってんだ」
そして両者は睨み合う。
しばらくそれは続いた。一見すると何も変化していないように見える。しかしそれは違う。篠乃の心中では冷めかけた憎しみの情がマグマのように噴出していた。
――この期に及んで。
篠乃は思う。まだ言うか、と。自分を含めたすべてのことを忘れていることも甚だ許せないのに、その約束を反故にするという。到底許せることではない。
――もういい。
とも思った。このまま、腹を立てたまま、さっさと終わらせてしまおう。話し合っても埒があかないのだから仕方がない。始めから協力なんていらないのだ。有無を言わせずに生を奪ってしまう力が

篠乃にはある。いまその気になれば、一秒もかからずに藤太を死なせることができるだろう。藤太の体を手に持った鎌で斬りつければいいのだから。

藤太はその間合いの中にいる。

しかし篠乃がそれをしないのは、また別の思いがあるからだ。

――惜しい。

篠乃はこの日がくるのを十四年間待ち続けていたのだ。再三書いてきたことだが、その長さは想像するよりずっと長い。人生のほとんどを使い、その思いに馳せてきた。自然、思い描く瞬間は幾分かの脚色が入る。その想像と、こうして迎えた現実との差異に篠乃は虚しさを感じていた。

――このまま終わらせていいのだろうか。

悔しさがある。

それのすべては藤太がすっかりと忘れていたことに直結する。それをなんとかして。

――後悔させてやりたい。

その思いに至ったとき、篠乃の唇は歪んだ笑みを作っていた。

## 4

篠乃の表情がにわかに変わった。
藤太はそれを読み取って、少しばかりの焦燥に駆られた。いや、焦りとするにはまだ足りない。ただ篠乃の唇が一瞬笑ったような気がして、それがただ解せないだけなのだ。
そしてそれは一層強まることになる。
「いいわ」そう言って篠乃は髪を掻き上げた。「そこまで白を切るのなら、チャンスをあげる」
「……チャンス？」
「そう、チャンス」大鎌を藤太の前から引いた。「考えてもみれば、十四年前の口約束なんて憶えてる方がどうかしてるのかもね」
突然の譲歩に藤太は警戒を強める。何も返せず、言葉を見送った。
「だから」篠乃は続ける。「私と、ゲームをしましょう」
「は？」
突拍子もないことだったために、藤太は理解するのに時間がかかった。
「いくら忘れていたって言ったって、私だって簡単に譲れる問題じゃないの。キミを死なせないと、私は本当の死神になれない。だから、折衷案」
藤太は篠乃の事情を知らない。だから篠乃が何を言っているのかわからない。
「ちょっと待てよ」
と藤太は言うが、篠乃はそれを聞いていないかのように話を進める。
「具体的に何をするかっていうと」思案する。「ここはわかりやすく『おにごっこ』なんてどう？」うれしそうに提案した。
「だから待てって」藤太はそれを制する。「俺、そんなゲームにのるなんて一言も」

――言ってない。
その言葉は言えなかった。
篠乃の心ない笑みは消え、またしても藤太の前に大鎌が振るわれた。
今度は首筋と違い、目の前に刃がある。絶対的な狂気をかざす力業だが、恐怖心を煽るその効果は絶大だった。
藤太は瞬時に押し黙る。瞳の数センチ先に迫る刃筋を見るに、それは模造品ではない。斬られれば死ぬ。それをまじまじと噛み締めた。
冷や汗が落ちる。
「ちなみに」黙らせた篠乃は忠告を言う。「キミに拒否権はないの。この提案は、キミに対する酌量の余地からくるものだから。もしキミが断るのなら、私は今すぐにキミを」
――死なすわよ。
ささやくように言った。
藤太はぞくりと背を凍らせる。
聞こえてきた声の量は不確かなほどわずかなものだったが、藤太には間違いなく聞こえた。目で聞いた。篠乃の唇がそう言っていた。藤太はただ二、三度ばかし頭を縦に振るだけで、やはり口に出しては言えなかった。
篠乃は藤太の返事に笑うと、それでいいの、と満足そうに言って鎌を引いた。
「私が鬼で、キミが逃げる。キミが捕まったら、というかこの鎌で刈られたら、ていうか死んだら私の勝ち。わかりやすいでしょ？」
ゲーム、という名を冠したハンティングに近い。
藤太は黙することを貫いていた。いまは一語だって盾突いていい時間でなかった。
本当のところは貫くなんて格好良いものではない。
篠乃は続けた。
「逃げていい場所は……そう、この町全域でいいよ。時間は日付が

変わるまで。そのときまで生きてたら、キミの勝ち」
質問はあるかと投げかけられた藤太は何も言わなかった。混乱して、頭がうまく働いていない。
「ないみたいね。それじゃあ開始」篠乃はぱちりと手を叩いた。「夕日が完全に隠れたら追いかけることにするから、逃げていいよ。精々、がんばって逃げるのね」
その夕日は三分の一ほどが山にかかっている。充分といえるほどではないが、不足というほどでもない。逃げて体勢を固めるには足りるだろうというところだった。
だったらいますぐこの場を去らなければならない。
藤太は篠乃に背を向けた。その背を向ける途中、半身のところでやりきれない思いで篠乃に訊いた。
「おまえ、なんなんだよ？」
「死神」
見下す笑みで篠乃は答えた。
藤太はそれ以上は何も訊かず走り出した。

◆

藤太が曲がり角で消えたのを見届けると、篠乃は加虐的な笑みを一層に強くこぼした。
唇からは前歯が覗く。
――さて。
と、このゲームの終わりを想像する。どんな顔をして私に許しを請うの？
篠乃にとって、これは勝敗の決している予定調和でしかない。藤太を生かして終わらせるつもりは毛頭ない。藤太をどういたぶるのかが焦点にある。
終わりは、なるべく悲痛な声で飾られるのがいい。悲壮な顔を浮かべているとなお好ましい。

――待ってくれ！
――お願いだ！
――俺はまだ、生きていたい！
その懇願を私は無視して……。
想像の中で鎌を振るう。
「あはは」
夕日に映える篠乃の笑みは、残酷で冷たく、そして美しかった。

## 5

日没までにはまだかなり時間がある。

すれ違うも疎らな雑踏の中、藤太は急ぐわけでもなし、静かに歩みを進めていた。始めこそ走っていたがすぐにやめた。嫌気が差したのだ。

その心中は決して穏やかではなかった。無意識のうちに行っている歯軋り、そして何かを凝視するわけでもないのに射殺すような眼光。これらはすべて、その心中から出たものだ。

そこには多分の悔しさがある。

――なにひとつ物を言えなかった。

これがひとつ。

そして何も言えなかったのはなぜか。

――臆したからだ。

これがふたつ目。あのとき藤太が黙ってしまったのは、篠乃が持つ得物の脅威に当てられたからだ。それが間近に迫ったのは二度。二度目は堪えたが、一度目は尻餅をついた。醜態である。羞恥はあるが、それによる逆上に似た怒りはない。それよりも、その凶器を前にして臆したということが問題だった。

一時的にもその脅威が去ったいま、こうして安堵している自分が腹立たしい。走ることをやめたのは、その安堵を自覚したときだ。

そして、それらの思いに拍車を掛けることがある。これがみっつ目だった。藤太にはこれが何よりも許せない。

――見下された。

篠乃との会話は十分にも満たなかった。しかしその短い時間で篠乃は幾度藤太のことを蔑んだかわからない。何度も何度も、藤太を虫けらのように見た。その瞳が、夕暮れの背景とともにまばたきをする都度よみがえる。

焼き付いて離れない。

篠乃は自身を死神だと名乗った。だが、藤太の頭にそのことは深く印象付いていない。いきなりオカルトなことを言われても、それは容易に信じられるものではないのかもしれない。
それでも、篠乃は藤太を死なせると言った。それは真実だろう。殺すということだ。
――キミを死なす。
――でもいきなりはかわいそう。
――だからチャンスをあげる。
――これは酌量の余地。
――精々、がんばって逃げるのね。
篠乃がこんな気まぐれを起こさなければ、いまはすでにあの世だろうか。こうして歩いているのは、歩けているのは、生きているのは、あの女のおかげ……。
そんな考えが頭をよぎった。
――ふざけるな！
藤太の中にあった怒りは頂点に達した。
それは篠乃に対してはもちろんだが、いまの状況にも向いている。この現状。その真意は篠乃の嗜虐を満たすことにある。藤太はそれをわかっている。
つまり、藤太は遊び道具でしかない。
――逃げて、たまるか。
ふとその気概が湧いてくる。
辿ってきた道を振り返った。塀に阻まれて篠乃は見えない。それでも、その先にいるはずの姿を睨む。
頭を掻きむしった。すれ違った主婦は何事かと身構えたが藤太の視界には入らない。
――返り討ちにしなければ。
その湧き上がる使命感は誰に課されたものではない。それ以外の言葉は生じない。代わりに混沌としたエネルギーだけを生む。
感情が爆発した。

――逃げてたまるか！

藤太は狂気に取り憑かれたように、瞳を開ききり、唇を限界まで歪ませていた。

逃げてたまるか。

すなわち、闘いの開幕である。

# 1

それから二十分後、藤太は町外れにある廃墟の前に立っていた。敷地境界の門には『寺田病院』と看板が掛かっている。もっともそれは錆び付いているため、初めて読むにはかなりの時間を要するだろう。

「はあ……」藤太はその門前で肩を落とした。

先ほど噴出した怒気は完全に消沈しているように見える。

できることなら会いたくない。そんな人物がこの先にいる。

それでも、事に優先順位をつけるなら会わなくてはならないのだった。

自分だけではどうしたって篠乃に勝てない。藤太はそれをイメージの中で嫌というほど味わった。藤太が篠乃をどう思おうと、不良の十人余りを一瞬で気絶させる実力はあるわけで、その事実は決して無視できるものではない。さらに篠乃の長物を前に、藤太ひとりだけでは確実に持て余す。篠乃がそれを振るう速度は身を以て知っている。藤太は反応さえできなかった。

――味方がほしい。

と藤太は思った。辛勝ではいけないのだ。藤太の願いを叶えるためには、篠乃を圧倒しなければならない。それには味方がいる。それも相当な手練れである必要がある。しかし多勢に訴えるようではいけなかった。多くを率いて篠乃に勝利したとしても、それは全体の勝利である。藤太個人の勝利とは言えない。

そんな藤太の我が侭に適う人物がひとり該当する。正確にはひとりだけ、であるが。

だからこそ藤太は気を落としながらも、こうやってその根城へと乗り込むに至ったのだ。

――河野亜貴。

と、目的の人物はいう。

藤太が安全を気にかけるなら、いま最も会ってはならない相手である。『猛獣注意』と看板に落書きされた文字を見ながら、藤太はその敷地内へと足を踏み入れた。

――ガーガーガーガー！

歓迎の声が沸いた。草むらや廃屋に群がっていた大勢のカラスが鳴き声とともに一斉に飛び立つ。藤太はそれだけで萎縮してしまう。

ここが廃業したのは十年以上も前である。その年月は人工物にこそ変化を与える。建造物自体は残っているものの、壁材はあらかた剥がれ、窓に張られたガラスは割れ、そしてアスファルトで固められたはずの地面からは藤太の腰ほどもある雑草が生い茂る。世間からは明らかに断絶している。

――異界。

そう表現するには充分だった。

藤太はまっすぐに廃院の入り口へと向かった。その足取りは重い。

そんな藤太と入り口を結ぶ直線に、一羽のカラスを認める。ちょうど中間の辺りだった。藤太に目をやり、首を傾げている。

もうすべてのカラスは飛び立ったと思っていた藤太は、なぜかその一匹に驚いた。

藤太は足を止めて睨み合った。避けることもせず、かといって無理に押し通ろうともしない。その待機の行動は大事を行う前の逃避行動かもしれない。覚悟を決める時間を稼いでいるのだ。

カラスは藤太に背を向けると、玄関扉まで跳ねて行った。そして結局はそこで飛び去った。

揺らいだ気持ちを引き締めて、藤太はまた歩みを進めた。

その廃院は二階建てで、それなりに広い面積の建物だ。が、なぜか玄関の扉は自動ではなく蝶番だった。仮にも病院として建っていたのだから、当時を思えば不便だっただろう。だがそのおかげで電気が通っていないいまでも開閉ができる。もっとも潤滑油が完全に切れているため、ひどく開きにくい。

――ギギギィィィ……！

耳に優しくないが響いた。
地盤が傾いているらしく、扉は閉まるときだけ自動だ。藤太がそこを通り、手を離した途端に勢いよくそこを閉鎖した。
ズウンという重々しい音が腹の底にしみた。
退路は断たれた。後戻りはもうできない。物理的な問題ではなく、精神的に退くという選択肢は除外された。そして音とともに、来訪者の存在はとっくに知られているだろう。
藤太は砂埃が薄く堆積し、かつ薄暗い中をゆっくりと進んだ。
壁は壁材の代わりに落書きで覆われている。スプレー缶で、文字とも記号とも絵ともつかない、そんなわけのわからない模様が所狭しと描かれている。シンナーの香りが漂ってきた気がして、藤太は顔をしかめた。風が滞っているため、いつまでも同じ空気が溜まったままなのだ。落書き自体は四年前から止まっているはずである。
少し広いところにでた。病院の総合待合所のようなところだったらしい。
鼠色のソファがいくつか並び、ここへ来るたび、座るものを待っているように思えてならない。もう皮が完全に剥がされスポンジしかないところもあるのに。
その空間の脇にある階段を登る。そして現れた何枚もの扉。廊下と病室を区切るもので、すべて木製だ。その中でも、一番きれいな扉へと藤太は向かった。
亜貴はそこにいるはずだった。

## 2

昔、この廃院はいわゆる町の不良どもの溜まり場だった。町のはずれということもあり警邏の巡回もそこそこだったので、たむろするには都合のいい場所だったのだ。建物の落書きは全てそのゴロツキが描いたものである。そしてその落書きは四年前からピタリと止んだ。

そのころ、何があったのか。

河野亜貴という人物がこの町に越してきたのだ。当時中学二年である。おそらくは、自分の居心地がいい場所を探していたのだろう。藤太はそう認識している。そして、ここが目についた。理由はそれだけだ。

不運はそこを根城にしていた不良の方だった。上は二十代、下は小学生の高学年という幅広い年齢層。人数でいうなら軽く五十人は超えていただろう。もしかすると百人にまで上ったかもしれない。そんな人数の集う要塞を、亜貴はたった一人で侵略してしまった。亜貴がこの町で作ることになる伝説のその第一号である。

この話は、当時まだ知り合っていない藤太にも流れてきた。脚色がついてやっと相応になる伝聞に、藤太は面白半分に聞いたものである。

かちゃりと木製のドアを開ける。

この建物の現存するドアはすべて蝶番である。そのほとんどが油のない、開けにくいドアだが、これだけは違う。亜貴が極たまに補充しているらしかった。

その部屋の窓からは、ちょうど夕日が直接注いでいた。そのオレンジ色の光に藤太は目を細める。その視界の中には逆光でできた人の影。

その真っ黒いシルエットが言葉を発する。
「よう。よく来れたな」
女の声と聞き違えるくらいのトーンの高いドス声。
間違いなく河野亜貴の声だった。
「来いって言ったのは、おまえだろ？」藤太は後ろ手でドアを閉めた。
その部屋にある唯一の家具はベッドである。上に載る布団がところどころほつれていて綿がはみ出て土埃をかぶっていようとも、たしかにそれはベッドだった。
毛布がしわくちゃにされて積まれている。
亜貴はそのベッドに腰掛けていた。
「オレは学校終わったらすぐ来いっつったんだけどな」亜貴が言った。
藤太の目が慣れてきた。
シルエットの中からは華奢な輪郭が浮かんでくる。
背は藤太より低い。髪は量の多いショートで、パーマをかけたように軽く波打っている。着ている服は夏用の制服だった。女物である。白いシャツに赤いスカーフを巻いて、そして下はスカートを穿いている。そこから覗く脚は爪先まで毛の一本も生えていない。裸足だった。そして整ったきれいな顔立ちはどこからどうみても美少女である。活発そうな美少女にしか見えない。
それが文庫本を片手に藤太を見据えている。
初見なら見惚れてしまうかもしれない。
しかし藤太は真実を知っているため、そんな情欲は燃やさない。燃やして堪るかと思っている。河野亜貴は正真正銘の男なのだ。人にその格好について言及すると、なぜかよく怒る。オレは女じゃない、と。明らかな矛盾があるが藤太はもう馴れた。
「いま、何時だ？」その亜貴が訊く。
やはり声はいつ聞いても女である。
「六時、ちょい過ぎ……だな」藤太は力なく笑った。

誤魔化したつもりである。
「よくそれだけ遅れてまぁ、オレんとこ顔出せたなって話だよ」
「はは……」
できれば来たくなかった、とは口が裂けても言えない。
「笑ってんじゃねえよ」
「おまえも、よく今まで待ってたな」
すげえよ、ととりあえず亜貴を褒めてみた。
その台詞は挑発以外の何物でもないことを、言ってから悟った。暇なのか？　と暗に言っているようなものである。
現代人は暇を嫌う。
その言葉を亜貴はさらりと流した。「何言ってんだ？」と。
それは亜貴の器量の大きさというよりも、亜貴を取り巻く環境事情がそう言わせている。
「オレはここに住んでるんだよ」
「ああ、そうだっけ」
亜貴と知り合ってから、何度このやりとりを繰り返したかわからない。未だに藤太は信じられない思いだった。
十何年も前に廃業したとはいえ病院である。常識、倫理等の作用によって、間違っても住んでみようとは考えない。そして、そこに住むことは当然ながら違法である。不法占拠に他ならない。おそらくこの敷地はどこかのだれかの私有地だ。
それでも、最低限の着替えや食料の備蓄などを見ると、やはり住んでいるのだろうと認めざるを得ない。
「それで、亜貴」藤太は話を切り出そうとする。「話があるんだ」
「おう奇遇だな」威勢よく返事する亜貴。「オレも話があるんだぜ？」
呼び出したのは亜貴の方だ。しかし藤太がここを訪れた理由は違う。
「とりあえず殴らせろ」ぱしん、と亜貴は拳を堅くして叩く。
――いま『話』って言ったよな？

藤太は心の中でつぶやく。その行いに拳はいらない。
「昨日いっぱい殴ったけど、一番殴りたいやつを殴れてないんだよな」亜貴は立ち上がって裸足に革靴を履く。
カポカポとした音を立てながら亜貴は藤太に近づいてくる。
「へえ……だれ？」訊いた。
答えは知っている。しかし訊かないといけない気がした。そうしなければ、亜貴の怒りはさらに増す。
「おまえだよ」ぱしん、とまた叩く。
にやりとした表情は、可愛く見えても悪魔の微笑みだ。
――ああ、やっぱりなぁ。
こうなるのか、と藤太は笑うしかなかった。それは完全に引き攣っている。
できれば、話をその方向へ進ませることは避けたかった。早急に篠乃についての助けを求めたかった。
が、そうはさせてもらえない。
――助けてくれ。
藤太は口には出さず、両の手を挙げる。降参の意味だ。
しかし亜貴は、ぱしんぱしんと拳を叩きながら、藤太に近づくことをやめなかった。

## 3

昨日のことである。
藤太は三晴にそのことを説明するにあたり、亜貴をひとり置いて逃げたと言った。
しかしそれは、まったくの嘘と言えない代わりに、また正確だとも言えない。
正しくは、三十三人の不良を置いて、亜貴ひとりから逃げたのだった。
昨日の騒動、総大将として不良たちの上に立っていたのは藤太だった。

昨日の放課後、藤太は町をふらついていた。特に理由があったわけではない。藤太は理由もなくぶらぶらとするのが好きだった。ただ、放課後に町をふらつくのは、家に帰ってもひとりすることがなく時間を持て余すから、ということもあるのかもしれない。
本屋によって漫画雑誌を読んだり、電気屋に行ってオーディオ製品を眺めたりした。
――もう帰ろうか。
そう思った矢先だった。
「おまえ、河野亜貴の連れだよな？」
そんな声がした直後、制服の襟を掴まれて路地の裏へと連れ込まれた。そこには数人の不良がたむろしていた。全員がバットなりバタフライナイフなりを持ち合わせている。
まるでこれからどこかに殴り込みに入ろうかという重装備だった。
――河野？　亜貴？　ダレだそれ？
最初はとぼけたように記憶している。

「嘘言ってんじゃねえよ」それは早々に看破された。「おまえ、これからオレらにちょっとシメられろ」
何を言っているのかわからなかった。理由を訊くとこう返された。
「これから河野んとこ行くんだけどよ、オレらだけじゃ勝てねんだわ」
――だから？
「だからおまえ捕まえて人質にすんだよ。抵抗したら殺すぞーって。で、逃げられねえようちょいと、な」
突発した危機に藤太は慌てた。第一、不良たちのその行為自体が無意味であることを藤太はよく知っていた。
亜貴に挑むというのもそうだし、そんなことで止まるような暴力ではない。
しかしそれらを一々丁寧に説明しても、不良たちは聞いてくれないだろう。
――ちょっと待て。話を聞け。
だから言った。
――俺にはひとりの妹がいるんだ。
「……あ？」
その言葉に不良たちは興味を示した。意外性は大事だと藤太は思った。
藤太が言った。その妹は病弱で、遠くの病院に入院している。体には無数の管が生えており、その一本でも外せば死に至る。
その居場所を亜貴に知られて、俺が逆らえばそのチューブを外すと脅す。
――それでもおまえらは俺を殴るのか？
そう言った。自分でも何を言っているのかわからなかった。
すべては自らの危機を避けるためである。
予想外だったのは不良の反応だった。みな黙し、たしかひとりは泣いていた。
「許すまじ、河野亜貴」泣いているひとりがつぶやいた。

もっと予想外だったのはその後の動きだった。その話が携帯電話の電波にのり、三十分後には『河野亜貴討伐連合』ともいうべき集団ができあがっていた。総勢三十三名。じっくりと数えたために藤太はその数字をよく憶えている。その大将に祭り上げられたのが藤太だった。集った不良は全員、藤太の言に義憤の声を揚げたものである。気骨が強い。

藤太を入れたその三十四名が河野亜貴の住居、つまりここに襲撃をかけるに至った。

その進軍する道中、勘の鋭い者がいた。

「どうしてあんなに強いのに、おまえみたいなのを傍に置いておくんだ？」

――あいつ、意外と女々しいんだよ。姿からしてそうだろ？

「ああなるほど」不良はそれで納得をした。

もう後には引けなかった。

## 4

その騒動の結末を藤太は見届けずに終わった。
戦闘の開始とともに、その混乱に乗じて逃げ出したからだ。やってられるかという思いがあった。
それでも、その結末の推察は難しくない。亜貴の圧勝で終わった。こうして平静と変わらない容姿で藤太の目の前に立つ亜貴を見ればわかる。怪我のひとつどころか制服の汚れさえないところを見ると、そうなのだろう。
亜貴は藤太の寸前までやってきた。上目遣いに睨む。そしてそのまましばらく黙った。香ってくる匂いは爽やかに甘く、間違いなく女のものだ。
「な、なんだよ」藤太は言う。
沈黙に耐えられなくなったのだ。
「約束破りやがって」
「約束……？」
「やっぱり忘れてやがるな」
亜貴はくしゃりと自分の髪を掴んだ。栗色に染めている。
「昨日は服買いに行くから付き合えって言ってあっただろ」
「ああ……」藤太にも心当たりがあった。「……って、あれ？」
何かが食い違っている。藤太はそんな気がした。
「ん？」
「おまえが怒ってるのは、昨日のことだよな？」確認として、藤太は訊く。
「当たり前だろ」憮然として亜貴は言う。「それ以外に何があるってんだ」
そこまでは正しい。
「工業のやつらをけしかけて、おまえに当たらせたことだろ？」
藤太はそのことで亜貴が怒っている、そう認識している。

「ちげえよ！　あんなのたかが雑魚だろうが」
いくらでもこい、と亜貴は言う。
「じゃあ、なんでおまえ怒ってんだ？」藤太はわけがわからなくなった。
「だから言ってんだろ？　昨日はオレの服、夏服買いに行くって、そう言ってたじゃねえか」
「あー……」藤太は二度目の説明でようやく合点がいった。
たしかにそんなことを言っていた気がする。
「って、はあ？　そんなことでおまえ怒ってんの？」
だからといって納得がいく話ではなかった。買い物なんてひとりでいけばいい。だからそう言った。
「そんなことってなあ……。それができたら苦労しねえんだよ」苛つく亜貴。「女物売り場なんてひとりでいけるか。……恥ずかしい」
そう言って、頬を赤らめる。
「こっちだって恥ずかしいわ！」妙な羞恥を見せる亜貴に藤太も苛つく。「その格好で言うなよ。だいたい、何が悲しくて男ふたりが一緒になって女物を買い漁らにゃならん」
「この格好ならカップルにでも見られて恥ずかしくねえだろ」
「カップルとか言うな！　気色悪いんだよ！」
「気色悪いとか言うな！　ぶっ飛ばすぞ！」
話は平行線を辿るようで、どこか論点がずれていっている。
「それに、昨日はパンツも買うつもりだったんだよ」亜貴は少し萎れた。「女物に男物下着って変だろ」
藤太はもう何を言っていいのかわからなくなった。いや、どこから言っていいのかわからない。
言いようのない気持ちの蟠りをわしゃわしゃと手で表現する。
亜貴は顔立ちから着ている服まで、外見でいうなら完璧なまでに学園少女だ。しかし下着まで女物を用いるのは抵抗があるらしく、そこだけは男物で通している。主にボクサートランクスだった。
――悪魔。

亜貴はそんな風に呼ばれる。しかし藤太の目の前にいる男は何か違う。その噛み合わなさに藤太はもやもやとすることが多々あった。
「とにかく」と亜貴は言う。「今日こそは行くぞ。これ以上汗だらだらで寝れるか過ごせるかってんだ」
「そのことなんだけど」藤太は気まずそうに言う。
藤太には目的があってきた。
それは亜貴の希望に沿えるものではない。
「ああそうだ」亜貴は何かを思い出す。「その前におまえ殴るのが先だった」
「なんでそうなる？」藤太は驚く。
完全に失念していたことでもあった。
「なんでだろうな」亜貴は額にしわを寄せて笑う。「いろいろ、むかつくんだよ。なんか意味わからんままに悪者になってるし、思い通りにいかねえし」
そう言うと亜貴は藤太の胸元を掴むと一気に引き寄せた。
藤太はそれで何も身動きがとれなくなる。
完全に腕一本の亜貴に動きを制御された。いつも思う。こんな華奢な矮躯でどうやって力を出しているのだろうと。
亜貴はよく人を文字通り飛ばす。水平方向ならば二、三メートルはゆうに飛ぶ。外見からはとても想像できないが。
その拳が、いまは藤太に向いている。
「腹に行くぞ」亜貴は言った。「まずは一発目だ」
――まずは、ってなんだ？
藤太は悲壮な疑問を持ちながらも、亜貴を信頼して腹に力を込める。
そしてやはり、拳は腹に来た。抉るようなショートアッパー。それは藤太の腹筋をものともしないで肉の中へとめり込んだ。その緩衝効果があるにもかかわらず、藤太は五センチほど浮いた。
「おうぇえ！」藤太は嘔吐く。
肺の空気がすべて出て行く。

「二発目」無感動に亜貴は言う。
――いつまで続くんだ！
ちょっと待ってと、すこしの時間を請うこともできなかった。
息が吸えない。息が吐けない。衝撃によって神経の伝達が混乱したようだった。頭に血が昇る。藤太はただ、空中で溺れた。
そこへやってきた二発目は藤太の意識を刈り取りにきた。今度も体は同じだけ浮いた。藤太の膝は折れる。それでもガクガクと鳴りやまなかった。
口からは涎。顎を伝って地へと落ちた。
「あー、ちょっとやべえかな。やり過ぎた」そんな亜貴の声も届かない。「じゃ、これで最後な」
唐突に尻を蹴られた。その衝撃は背骨を伝播し頭頂まで一直線に届いた。結果、藤太は宙を舞う。意識混濁とする中で、藤太は支えのまったくない不思議な感覚を味わった。
その感覚とともに、藤太は意識を失った。

## 5

再び目が覚めたとき、藤太は夕日に照らされている亜貴を見た。
藤太は窓際にいて、そして亜貴はベッドの上で文庫本を読んでいた。夕日が背にあるということは、部屋の端から端まで飛ばされたということだろう。
「お、やっと起きたな」亜貴は瞳を向ける。「ちょっとやり過ぎたかもな。まさかあんな程度で気絶するなんて思わないし」
藤太は腹に手を当てる。まだ気持ち悪い。
「俺をそこらの不良と一緒にするなよ」喉を涸らしたような声だった。
口は胃酸の臭いで満ちている。それで喉を焼かれたのかもしれない。
「自慢になってねえよ、それ」
「自慢なんかしてねえよ」藤太はそうつぶやいた。「どれくらい寝てた？」
「まあ十分くらいじゃねえの？　時計ないからわからねえけど」
――十分。
時間を無駄にしてしまったようである。
藤太は立ち上がって山にかかる太陽を見た。気を失う前と比べて、だいぶ輝度が下がっている。あまり、時間はないようだった。
藤太は腹に異様なまでの痒さを感じた。その原因を抜き取る。黄色く、そして層の薄いスポンジだった。一階にあったソファからはぎ取ったものだ。保険として衝撃吸収のために仕込んだはいいが、まったく役に立たなかった。
舌打ちをする。
「じゃあ藤太、今日こそ行くぞ」その背中に亜貴は誘いをかける。
行き先は当然、服屋だろう。
しかし藤太はその誘いに乗るわけにはいかない。

それとは別のもっと重要な目的がある。そのために来た。
「そのことなんだけどさ、亜貴。今日は無理だ」
「あん？」亜貴の表情が曇る。「どういうことだ？」
「ちょっと俺、変な女に殺されかけてる」
「……どういうことだ？」文庫本を閉じた。
藤太はその経緯を簡単に説明をする。
歩いていたら昨日の不良に絡まれたこと。そして殴られる寸前のところで現れた少女に助けられたこと。
そして今度はその少女に命を狙われることになったこと。
「なんだそれ？」亜貴は眉を寄せる。
「なんか、自分は死神だって言ってたな」
「……変な女だな」亜貴も同じことを言う。「電波さんか？」
「わからん」
ふたりして唸った。
実際に見た藤太でさえ、結局のところ西崎篠乃が何者なのか判断できない。
「でもよ」亜貴が言う。「命狙われてるって何だよ。いきなり物騒すぎるだろ。どんな怒らせ方したんだっての」
怒らせた。そのこともあるのだろう。しかしそれ以前に、ことは始まっていたようでもある。
――約束。
と言っていた。やはり藤太には憶えがない。
藤太が黙って何も言わないので亜貴は別のことを訊いた。
「まあ、なんだ。そいつがどんな変な女で、危なかろうが、所詮は女だろ？」
亜貴の持つ不可解はここに尽きるようだった。
いくらなんでも、それがただの女ならば、どれほど物騒な思考回路を持っていようともそれほど危険はないだろう。そう思っているらしい。
しかしここから先の事実がそれを大きく覆す。

「亜貴おまえ、十人の人間を気絶させるのに、何秒かかる？」藤太は訊いた。
多少回りくどい。
「んー？　ひとり一秒、か二秒でやるとして」目を瞑って想像してみる亜貴。「十五秒くらいか？」
それを言って、結局は計ったことがないからわからない、と付け足した。
「で、それが？」
「いや、それが……」
あのとき藤太は目を瞑っていた。その間の体感時間を実時間に変換してみる。
回想の中で風が肌を撫でる。
「そいつ、三、四秒で十人ちょっとを倒しやがったんだ」
ぴくりと亜貴の目が動いた。ありえるのだろうか。そんな顔をしている。
「催眠術じゃあ、なかったみたいだ」
そんなことを言う藤太を亜貴は睨め付けた。
「あと、でっかい鎌を持ってたな。で、ものすごい使い慣れてるみたいだった」
「鎌？」これには亜貴も食いついた。「って言うと、草とか刈るときに使うアレか？」
「そう、それ」頷く。
しかしその禍々しさは比べられるものではない。
「それが、めちゃくちゃ大きいヤツ」
「どれくらいだ？」
「俺の身長よりちょい小さいくらい」
――ありえるのだろうか。
そんな思いがある。
藤太だってこうして目覚めて説明すると、幻だったような気にもなる。伝聞でしかない亜貴にはなおさらだろう。

「なんか知らねえけど、面白いことになってんだな」笑わずに亜貴は言った。「大変だな」
「その……亜貴」気まずそうに藤太は言う。「いまから俺はそいつを返り討ちにするんだけど」
「ふうん、なんで？」
「……なんでもだよ」
与えられた屈辱を思い出す。それを払拭するにはそれしかない。
藤太は続けて言った。
「その手伝い、してくれないか？」
「おう、いいぞ」亜貴は簡単に承諾した。
お願いをした藤太が呆れてしまうほどだった。
「なんか、ずいぶんと簡単だな」
「おまえは友達だからなぁ」
亜貴はゆっくりと呟いた。

## 6

日は山へと完全に消え去った。世界の光源をなくし、辺りは一気に暗くなる。

篠乃と対面するにはまだ時間があるだろう。ひょっとしたらこちらから出向くことになるのかもしれない。

藤太には篠乃がここを見つけるなんて考えられなかった。方法がない。しかし見られているような、そんな嫌な感覚が頭の底に付いて回っている。

「で、具体的にどうするんだ?」亜貴は訊いた。

「まだ何も決めてない」

「おいおい……」

その言葉に藤太はむっとした。

「しょうがねえだろ。こっちだってまだ混乱してんだ。おまえを味方にするところまでで精一杯だよ」

亜貴は満足そうな笑みを浮かべる。

「なんだよ、気持ち悪い」

それについての藤太の感想は極めて冷めている。

――友情。

について、ふと藤太は考えた。本当はこんなことを頭に過ぎらせている時間などないというのに。

亜貴は、自分に友情というものを感じているのだろうか。だとしたら少し、後ろめたさがある。藤太は亜貴を友達だと思ったことなどないからだ。こうして用事がなければ会おうとも思わない。

魔が差したように関わってしまって、それが今でも続いている。そんな関係だ。

四年前の河原。後ろ手にロープで縛られて転がされている亜貴を見つけた。亜貴はその当時から外見とともに結構な噂になっていた。

だから、それが河野亜貴だとすぐにわかった。

――何してんだよ。
「見てわからねえか？　リンチに遭って、その事後だよ」
――ふうん。不良は大変だな。
「あいつら絶対に許さねえ」
――ああ、じゃあさ。手伝ってやるよ。
「いらねえよ、ふざけんな」
――ロープぐらいは切ってやるって。
長くなる懐古に浸りそうになった。どうしてあのとき、関わろうかと思ったのか、わからない。
その考えの折り、急に現実へと引き戻された。
「藤太」
四年前ではない、現在にいる亜貴の声だった。
なんだ、と口を開く前に悟った。
――ズウン。
扉の閉まるその音が重々しく響いてきた。

ここにいると、音はこんなにも轟くのだと藤太は初めて知った。扉の閉じる音はもちろんのこと、それ以上に藤太を戦慄させたのは足音である。
革の靴でタイルを踏んで歩く音が一歩ごとに近づいてくる。その一回一回の音が、二階に位置するこの部屋にまで届いてくる。音は幾重にも空間に反射し、残響を残す。
藤太がここにいるときに人が訪ねてきたことは一度もない。
足音は決して速くない。しかし決して遅くもない。およそ人間の歩く平均的な速度で近づいてくる。そのスピードがこんなにも恐怖感を煽る。
――ただの足音のはずなのに。
藤太は力まずにはいられない。
亜貴の態度はそんな藤太に比較して全くの対照的だった。さすが

に慣れているのだろう。紺色の靴下を無表情に履いて、その上にまた革靴を履く。裸足で革靴はしっくりこない。
だからそれは亜貴なりの戦闘態勢ということだろうか。そして亜貴は立ち上がった。
部屋の明るさは加速度的に減っていく。
「今日、誰か来る予定あった？」藤太は訊いた。
「いんや？」そんなことはないと亜貴は言う。
どちらもドアから目を離さない。足音は階段を登り始めた。
こんな忘れられたようなところに来るとしたら、藤太か町の不良たちしかいない。藤太は運動靴だからあまり音を立てないし、不良はもっと下品に歩くだろう。それにきっと、ひとりで来ることはない。
それならば……。藤太は、もうこの足音の主をひとりしか思い浮かべることができない。
――西崎篠乃、死神と名乗ったあの少女。
夕焼けの光景がまたしてもフラッシュバックでよみがえる。
藤太は確信を持っている。なぜだかは分からない。篠乃はこの場所を知らないはずである。付けられていたのかもしれない。しかし、そんな推理など今は不必要だろう。今必要なのは、戦う準備である。
足音は迷わずこちらへ向かってくる。まるで居場所など初めからわかっているかのようだ。
藤太は静かに、臨戦態勢を心の中で作る。
足音はもうすでにそこまで来ていた。
――コツ……。
ちょうどドアの前で足音は止む。板一枚を挟んで対峙している。その姿は見えずとも、明白に想像がつく。
その相手がドアノブを回して入ってくるのを藤太、そして亜貴は待っていた。
しかしその常識は裏切られる。
白く塗られた木製のドア。そのふたつある蝶番の留め具を精確に

切断する光が、たった一筋だけ走った。まさに光と言えるだけの一瞬である。そしてそのために、ドアは支えをなくして地に落ちた。ドアは風を生み出しながら、驚くほど静かに、藤太たちの方へと倒れる。

風に煽られながら唖然とした。

その倒れたドアの先に立っていたのは、半笑いを浮かべた篠乃である。

カタンとドアを踏んで入ってきた。

「罠……は、なし」

右手には件の得物、大鎌が提げられている。暗がりでさえ圧倒的な存在感。薄く光っているようにも錯覚を起こす。

「でも助っ人」そう言って、篠乃は少し唇をとがらせた。「許した覚えはないのだけれど」

「禁止された覚えもないが」藤太は軽口を叩く。

「それにしても」篠乃はため息をはく。「恥ずかしくないの？」

――食いついた。

心でにやつく。

「こんな、かわいい女子に頼って」

藤太は咳払いをひとつする。

「あーあー。誤解のないように言っとくけど、こいつは男だぞ」

篠乃はまじまじと見つめ、そして訝しんだ目を向ける。藤太にではなく、亜貴にである。

「……変態なのね？」

この瞬間、藤太の亜貴を味方にする上で、付随的にあった期待が現実のものとなった。

亜貴を初めて見る人間はみな、はじめ女だと思う。そして真実を知ると、だいたい取る態度は決まっている。なおも疑うか、貶すかである。

亜貴は静かに震えた。それを藤太は確認する。亜貴は自身を変態と貶す人間に容赦をしない。

「いまの言葉、たしかに聞いたぞ」亜貴の笑みは悪魔の笑みだ。「あとで憶えてろ」
そんな亜貴の怒りを軽く流して篠乃はまた藤太を見た。
「それで、どうするの？」
「とりあえず、俺も暇じゃないんでな。日付変わるまで付き合ってられねえんだ」挑発できる語彙を選んだ。「だから、ここで終わりにさせてもらう」
「どうやって？」篠乃はぶれない。
「ここでおまえを倒して、それでおまえが負けを認めれば、仕舞いだろ？」
「できると思う？」篠乃は不敵に笑う。
「あたりまえだ」
これ以上の問答こそが仕舞いだった。
篠乃に向けるのは言葉以上に雄弁な敵意。それだけだった。
それを以て藤太は戦闘の構えをとる。
両者の距離はおよそ五メートル。遠いのだろうか、近いのだろうか。藤太にはよくわからなかった。
静寂の中、藤太は深呼吸を繰り返した。冷や汗がでた。流れる血液は次第に冷たくなっていく。鼓動は他人事のごとく耳に届く。先ほどの恐怖がぶり返す。一度感じてしまった恐怖は拭いされるものではない。深呼吸は、その緊張を隠すためと、冷静さを取り戻すために行われている。
篠乃は悠然と構えている。大鎌を右肩に担ぐだけで、それはもう構えとすらいえない。
――かかってきなさい。
そう言っているのが目に見えてわかる。
だが、簡単に藤太は踏み込めない。リーチの長さを前には攻め倦ねるしかなかった。無策に飛び込めば、その餌食だろう。
そんな藤太に亜貴は言った。
「右から行け」

口を拭う振りをして、藤太にだけ聞こえる声で。
それが挟撃の誘いであることを藤太はすぐに察した。
懸念はなかった。あればもたつく。何より畑違いである。戦闘に関しては、亜貴を信じるほかはない。信じて、特攻をかけるのが一番の得策だった。
生唾を飲み込む。次の瞬間に藤太は駆けた。
亜貴も同時に駆ける。
合図という合図はないに等しいが、互いに呼吸を合わせるのが上手かった。
弾けるように右斜め前方へと跳んだ。藤太、篠乃、亜貴の順に一直線上の配置が一瞬できる。
藤太はそのまま一足で一転、勢いを殺さず篠乃へとまた跳んだ。どこを狙うというわけではない。ただ組み伏せれば、結局は男女の力の差がある。それが叶えば終わりだと思った。ならば大砲の弾のごとき強さと勢いを持って体当たりを喰らわせるのが一番効果が高い。
一方の亜貴。亜貴が担当するのは篠乃の大鎌だった。亜貴は藤太のようには突っ込まない。一拍置いた。一瞬ののちにできる篠乃の隙を待った。
そして藤太は篠乃へと強襲をかける。動と静では、どうしたって動かない方が背景と化す。
篠乃は藤太へと顔を向ける。一瞬でも篠乃の視界から亜貴は消えた。
亜貴は視界から外れたまま腕を長くして伸ばす。狙うは大鎌。目下の脅威を取り除く。
『手伝い』とはそういうことだ。
篠乃は藤太に向けてその大鎌を振ろうとした。
しかし鎌は一寸たりとも動かない。振り向いた。
亜貴の左手がその鎌を、その柄をがっちりと掴んで離さない。
藤太が迫る。

――喰らいついた！
篠乃は歓喜の表情を亜貴に向ける。

## 7

その数瞬のやり取りはまさに釣り合い、化かし合いだった。
亜貴は藤太を生き餌にして、篠乃の隙を釣った。またその餌に獲物を食わせる算段でもあった。
そして篠乃は、その隙こそが餌だった。
気付いたのは亜貴だった。篠乃が美しく破顔していた。それを見た瞬間。
――釣られた。
そう思った。動くことはできなくなった。
篠乃はどうやったのか、亜貴の左手から大鎌をあっさり引き剥がすと途端に身を翻した。その影からは藤太が現れる。篠乃は闘牛士でもあるかのようだった。
藤太は勢いよく突っ込んだ。亜貴はなす術もなくそれを受け止めるしかなかった。体重の軽い亜貴は衝撃に弱い。簡単にふたりはもつれて吹き飛んだ。
倒れた亜貴が見上げると、そこにはもちろん篠乃がいた。一緒になって倒れているふたりをまとめて斬りつけるつもりのようだ。その態勢に入っている。バネ仕掛けのように体を捻って力を溜め、それが爆ぜるのを待っている。
キチキチと空気が鳴る音が聞こえる。
もう時間がない。
亜貴は悟って藤太を強引に剥がし、そして右横へ飛ばす。が、右腕一本ではどうしたところで時間がかかる。
「だあああ！」気合いとともに、自身は左へと跳ぶ。
ここで大鎌が勢いよく振るわれる。
軌道にあるのは、藤太のために残した右腕。
――刈られた！
亜貴は思った。右腕の途中から、先がない。そのなくなったとい

う感覚は本物で、数瞬後に襲ってきた激痛も本物だった。
だが、わけがわからない。思わず、ないはずの腕を左手で掴むが、それはそこにあるのだった。
混乱して目で確認しようとする。
「キミの右腕、死んじゃったよ？」
その耳に、そうささやく声が届いた。
亜貴はぞくりとする。何が起こったのかわからない。危険だ、という思いが渦を巻く。
これ以上、相手するのはとにかく危険で、それしかない。
亜貴は投げた藤太を左手で拾うと、とっさに窓から逃げ出した。
ガラスとともに地に着地する。

「何があったんだよ！」藤太はわけもわからず走る。
どこへ向かうのかもわからない。とにかく亜貴について行くしかない。
「わかんねえよ！」亜貴は怒鳴る。
「なんで逃げる！」
亜貴に庇われた藤太は、体勢のこともあって起こったことを見ていない。混乱は当たり前だった。
「あいつはヤバい！　とにかくヤバい！」
いや、混乱しているのは亜貴も同じだろう。むしろ亜貴の方が著しいといえるかもしれない。
「何があった？」それを見て藤太は声の調子を柔らかくした。
「オレの右腕」亜貴はぎりりと歯を噛む。「……斬られた。盗られた」
「は？」藤太は亜貴の腕を確認する。「いや、付いてるぞ？」
藤太の見る限り、亜貴の右腕は健在で、それに血の一滴だって伝っていない。変化のないように見える。
「感覚がねえんだ。力も入らない」

いつもと違うのは、その付いている右腕がまったく機能していないように見えることだった。
亜貴はいま、左手の一本で走っている。右手はぶら下がっているだけだ。走る勢いに翻弄されていた。
「刈られた」亜貴は言う。「いや死んだって言ってた。あいつ、いったい何なんだ？」
亜貴の狼狽は、藤太が初めて見るほどに強い。
――死神。
藤太の中で燻るような不安が胸を焼いた。その言葉は思わず口に突いて出て行った。
「それだ！」亜貴はその言葉を拾う。
ふわりと風が頬を撫でた。夏の季節にそれは涼しすぎた。
藤太はこの冷気に身に覚えがある。それは夕暮れの刻。
後ろを振り返った。
亜貴も同じく振り返る。
「ぎゃあああああ！」悲鳴はふたりともに起こる。
「付いてきてる！　付いてきてる！」亜貴は涙目で言葉を付け足す。
――一歩……一歩……。
その歩幅は想像以上に長い。たったの一足が三秒ほどの滞空。恐ろしく速い。
顔はこれ以上ないほどの破顔。提げているのは件の大鎌。みるみるうちにその距離を縮められている。
ホラーだった。
もう一心不乱に逃げるしかない。もはや相手は人外であることに一分の疑いを持たない藤太だった。
「藤太、おまえ何したんだよ！」今度は亜貴が訊く。
「わからん！」返答は同じだった。
――約束。
その言葉が引っかかる。しかしそれを必死になって吹っ切る。絶対にそんな約束はしていない、と。

「藤太いいか」ここで亜貴は幾分かの冷静さを取り戻しつつあった。
「もう闘おうなんて考えるな！　逃げろ、とにかく逃げろ！　何があったかなんて知らねえけど、追いつかれたら終わりだと思え！」
亜貴の冷静さを見て、藤太もそれに倣うことができた。冷めた頭で考える。
――あいつに刃向かうのが間違いだったのだ。
「ああ、わかった」亜貴の言葉に従う。
もう遊び道具だろうがなんだろうが、生き延びることが勝利条件だった。
――絶対に逃げ切る。
その考えが藤太の脳を焼く。
藤太と亜貴は懸命に走っているにもかかわらず、篠乃の体はぐんぐんと大きく見えてくる。
――このままでは逃げ切れない。
「じゃあ、亜貴とはここでお別れだな」藤太は言った。
「おいそんなこと言うな」焦る亜貴。「ここまで来たんなら最後まで付き合う」
「いや、ここから先は俺ひとりで逃げる」
言い争う時間ではない。だが、お互い譲れないものがある。
「ふざけんなよ、おい藤太！　おまえは俺の……！」
「だから亜貴、お別れだ」力なく笑う藤太は、どこか悟り顔だった。
「おまえはここで、食い止めていてくれ」
そして信じられない行為に出た。走っている亜貴の脚に足払いをして転がせる。
亜貴は派手に転がった。
「おい！　藤太」亜貴が再び顔を起こしたとき、喉から出るのは間違えようのないほどの怒号だった。「ふざけんな！」
「馬鹿野郎！　俺が逃げるためじゃないか！」
そんな捨て台詞を吐いて、藤太は遁走を続けた。
町はすでに完全な夜の色となっている。

◆

転んだままの亜貴を篠乃は跳び越えて走る。
「馬鹿ね」その際、藤太と同じ言葉を吐いた。
「いや、おまえは無視すんな」
頭付近に置かれた脚をとっさに掴む亜貴。
「ぶぎゃっ！」
そう言って、篠乃は盛大にこけた。両手を投げ出していて、受け身などを取れた気配はない。それでも、大鎌を手放すことはなかった。
「何するのよ」振り返ったときには涙目で、鼻を少しだけ擦っていた。「痛いじゃない」
それだけで済んだのは幸運だろう。
「てめえがオレを無視して行くからだろ？」人ごとのように言う。
そして立ち上がる。制服に付いた土埃を払いながら、篠乃が起き上がるのを待った。
「藤太はあとに回すとして、まずは」その間に独り言をする。
それを篠乃は切った。
「変態に用はないのよ」立ち上がる。
「そう、それだ」亜貴は人差し指で篠乃を指す。「オレ、それを言った人間はとりあえず全員制裁を加えてんだよ」
男と女問わずな、と注釈も付けた。
「憶えとけ、って言ったよな」亜貴はドスを効かせて睨む。「てめえも例外じゃねえんだよ」
万人が恐怖する亜貴の睨みを受けても篠乃は平然としていた。
「残りの腕一本で？」
「関係ねえよ」
「さっき、ふたりでかかって負けたの、憶えてる？」
「負けてねえ……って言ったら小物臭いな」亜貴は頭を指で掻いた。

そして体勢を整える。「サシでやったら、わかんねえよ」
そんな亜貴に、篠乃はどこ吹く風のように考えを巡らせていた。
「んー、ま、遊んであげるくらいならいいかな。時間ならたっぷりまだあるし、むしろ持て余してるくらいだし」
そう言って、指笛を吹く。耳をつんざくような大音量だった。
亜貴は顔をしかめて耳を塞ぐ。
「なんだよ、いまの」
「口寄せ……のようなもの、かな」
余計わからなくなる亜貴に、篠乃は笑顔を作った。
「気にしない気にしない」鼻には擦り傷がある。「じゃ、しばらくは遊んであげる」
「オレは遊ぶつもりないけどな」
そうしてふたりの闘いは始まった。

# 1

夕闇に夜の帳が落ちきった。
それでも町は暗くならず、太陽の代用品が町を照らす。
その人工の光は空へと向かず、むしろ軟らかく届くはずの月の光を阻害する。中心街から見る夜空には星も月もなかった。
藤太はそんな暗闇だけしかない夜空を見上げた。吸い込まれそうだ、なんて感傷は抱かない。先ほどまで走っていた、その疲労をはき出すだけである。息は荒く、汗は滝のように体中から流れている。汗に濡れた皮膚が街灯の光を反射させている。
藤太は路地の裏に入り、そこでまたしても天を仰いだ。服の襟を掴んでは腹に風を送る。
――やっちまった！
愕然とした思いに満ちている。絶望にも似ていた。
あのとき藤太は自身の行いについて、疑問のひとつも持たなかった。自分の助かる術が最優先だったからだ。トカゲの尻尾切りと同種の感覚だろう。本体が藤太で、尻尾が亜貴だ。
しかし時間をおいて考え直すと、それはとんでもない所業であることに気がついた。亜貴は尻尾ではない。そして自分もトカゲではない。
――絶対に怒らせた。
それを思うと、篠乃と対峙したときとはまた違った恐怖に震えた。
――違うんだ！
と自らの行いに首を振る。
――ただ魔が差しただけなんです。
明日以降、怒りに燃える亜貴にどんな弁明をしようか、といまから気が気でない。と言っても、どんな言い訳も無駄だろう。口八丁が通じる相手ではない。
しかし、と過ぎてしまったことをいくら考えたところで仕方がな

い。

――いまは。

自分の助かることだけを考えればいい。亜貴の怒りに怯えることができるのなら、それはきっと幸せなことだろう。

不思議なことに藤太は、亜貴が篠乃に殺されるといった想像を微塵もしなかった。そんな思考すら浮かばない。それは亜貴の実力を知っているから、というのもあるだろう。そして、西崎篠乃があくまで守城藤太を主軸において事を起こしている、ということがわかっているからかもしれない。理由を挙げるなら、こういうことになるだろうか。

とにかく、と藤太は思考を切り替える。問題は藤太自身が取るべきこれからの行動だった。今日を無事生き残れるか。返り討ちにしようなんて考えは、亜貴の言う通りに切り捨てた。

集中しようと目を閉じる。

――あいつはいったいダレなんだ?

そんな疑問が浮上する。死神、と言っていた。そして約束。

――だから違う!

藤太は心で叫ぶ。いま、そんなことはどうでもいい。死神も約束もない。すべてが濡れ衣だ。そう自分に言い聞かせる。

大事なのは、やはり助かる方法だった。藤太は改めて集中する。場所に留まるのがいいのか、それとも動き続けた方がいいのか。それよりもっと有効な手段はないか。そんな考えに焦点を絞る。

そのはずだった。

思考の途中からある雑音が藤太の邪魔をしだした。

猫である。目を瞑っているので姿は見えないが、その鳴き声が近くから、そして遠くからやってくる。路地裏だからきっと残飯を漁りにきた野良だろう。と、始めこそ気にしていなかったが、懸命に捻りだす思案の端々に、その姿が見え隠れするようになった。

どこかに身を隠すにしても、提案するその場所に猫がいる。保険として武器を調達しようと考えても、想像するのは猫の爪、または猫の手、そして肉球。とてもかわいい。

――違う！

考えを振り払おうと首をふった。だが、自分も猫になればそれで解決だと、まさか猫になるとは思うまいと、猫耳をつけて変装するその姿を想像したときに限界を感じた。思考を投げ出す形で、藤太は目を開ける。

「は……？」

その瞬間に絶句した。顔は蒼く染め上がる。

そこにはおびただしい数の目があった。わずかな光を反射させてすべてが爛々と光っている。猫の、いや獣の目だった。それがふたつあって一匹。何十匹いるのか数える気にもなれない。それが口々に鳴き声を発している。普段目にするおとなしさはそこになかった。

状況把握はできそうにない。

今朝のことが頭をよぎった。右頬と左手の甲、引いたはずの鋭い痛みがよみがえる。

その猫の軍勢が、こちらに敵意を表していることは簡単に伝わった。

最前にいる数匹の猫は前足を屈めて、今にも跳びかかってこようとしていた。

藤太はそのうちの一匹と目が合う。

――来る！

藤太の予感は直後、現実となる。

その猫は凶悪な叫び声とともに藤太へと跳びかかった。狙われたのは胸である。そこを目掛け、一直線に跳躍をする猫。四足だから可能な生きる弾丸。その素早さは正面に立って初めて分かるものがある。藤太は半身になってかわした。たとえ速度が鋭くとも、瞬間的に襲撃を知覚できれば、避けることは比較的容易だった。猫は藤太の背後にあるコンクリートの壁にぶつかって崩れ落ちた。

その第一陣が引き金になった。続く二陣、三陣と矢継ぎ早に跳んでくる。弾丸と比喩をしても、ハンドガンなどの銃火器では当然ない。差し替えるべきマガジンなんてあるわけがないし、さらに銃口なども存在しない。猫たちは個々の思うまま、思うタイミングで藤太に攻撃を仕掛けてくる。

背中が壁なので後ろの死角はない。その方向への配慮はいらない。が、その分退路もない。藤太はその場でなす術もなく踊らされるしかなかった。なんとか攻撃をすべてかわしていた藤太だったが、多勢には敵わない。脛を噛まれた。

「いっ！」鋭い痛みが走る。

そして崩れた。その隙を突いて顔面にやってきた猫を避けきれず左手で払う。その際小動物と思って手心を加えたのが間違いだ。その猫は腕に絡んで噛みつく。その牙は制服の袖を易く貫通し、藤太の皮膚をも貫いた。

猫の刃がまたしても刺さる。

――ッ！

脳髄へと駆け抜ける鋭い痛み。歯を食いしばってそれを耐える。

藤太の動きが一瞬止まる。その一瞬が命取りだった。五、六匹が藤太の身体にへばり付くと、爪を立て、そして牙を立てた。同様の痛みが多くの部位から押し寄せる。

藤太は歯を食いしばって耐えたが、その口の端からは呻きが漏れる。路地を抜けばければと光ある方を向くと、その一帯には猫が層となって待ち構えていた。藤太を逃がさないつもりのようだ。

――訓練されすぎだろ！

憎々しい思いでそれを見ながら、その反対方向へと転がった。退路を防いだ分、そこが手薄だったからだ。さらに小路に入り込むことになる。が、仕方がないと妥協した。転がりながら張り付いている猫を引っぺがし、また転がった。そうやって体表の面を固定させず、猫の追撃を免れた。

集団をなんとか抜けると、傷だらけになりながらも足をついて走

り出した。その姿はまさしく敗走兵そのままである。
背後から足音はせず、しかし代わりに鳴き声が鳴り響く。猫と藤太の鬼ごっこが始まった。

## 2

そこは廃院の庭。
対峙しているふたりはどちらも息が切れていた。少女ふたりが死闘を演じているように見えるが、片一方は男である。
切れかかった街灯がふたりを瞬間的に照らしている。
「一応、名前教えてくれね？」亜貴が訊いた。
戦闘の合間に訪れた、わずかな均衡の時間だった。
「篠乃」息を整えながら答える。「西崎、篠乃」
「オレは河野亜貴ってんだ」
「私は訊いてない」ぴしゃりと言う。
「ああそうかよ」亜貴はうんざりした顔をした。
その額には汗が滲む。夏場に出る汗はひどくまとわりつく感じだ。それが亜貴の眉毛を通り抜け、目に届く。普段ならそこで拭うところだが、いまはそのための腕が上がらない。両方だ。
「てめえ、いったい何者だ？」
「死神だって言ってるでしょ」苛ついている様子だった。「そっちこそ何なのよ。かわいい格好して意外に強いし」
それに、と言う篠乃の語感が強くなる。
「両腕とも落とされて、それでも向かってくるなんて、絶対に普通じゃない」
亜貴は無形の位を取っていた。それは構えないという構えである。そうせざるを得ない。
「おう。オレは普通じゃないからな」亜貴は得意げに笑う。「慣れればこれでも意外にいけるぜ」
「マゾヒズムでも入ってるの？　この変態」
「ああくそ」その笑みを引き攣らせる亜貴。「まだ言うか」
「事実でしょ？」
「違うってんだろ、ぼけ」またしてもうんざりとした顔を見せた。

「いい加減、その面ぶん殴らせろ」
「腕使えないでしょ」
「じゃあ蹴らせろ」
「絶対、いや」
「いや、絶対蹴る」亜貴は身構えた。「なんとなく仲良くなれそうな気がしたけど。気のせいだったな」
腕は使えなくても、構えが取れなくても、体勢は固められる。
「私はいい加減飽きてきたわ」そう言って篠乃は構えを取った。
大鎌を大きく右袈裟方向に突き上げ、そこからの横薙ぎに特化した型だろう。むしろそれしかできない。しかし、それがわかったところで振り切る速度は不可避の域に達している。
それは亜貴とて、例外ではない。二度の事実が証明している。
空気が一気に張り詰める。
仕掛けたのは篠乃の方だ。亜貴との間合いを瞬時に詰め、その横薙ぎを放つ。
対する亜貴は引かず、どころか地を蹴って前に進み真っ向から迎え撃つ。刃と篠乃の間に体を入れた。亜貴の体は刃に触れず柄に触れる。痛みはない。そして亜貴は独楽のように自転する。腕が体から離れ出す。
篠乃にしてみればくるはずのない左腕。それが裏拳として顔を襲ってくる。
動かせないからといって、それは動かないわけではない。完全に脱力した腕は鞭のようにしなりその速度と威力を増す。
篠乃は思わずしゃがんで避けた。バランスをとるためには腕を突き出す必要がある。その先の手には大鎌が握られている。その意識がいま外れる。
その大鎌を今度は亜貴の右手が狙う。相変わらず感覚のない腕。しかし付いている限りはエネルギーを伝えることができる。その回転によって生まれたエネルギーは女の握力からそれを簡単にはじき飛ばした。

大鎌は篠乃の手を離れ、上空に舞い上がった。
脅威は去った。篠乃は丸腰。
だったら。
「あとはてめえを蹴るだけだ！」
――そのはずだった。
「はいはいすごーい」篠乃は冷めた瞳で言う。
その手にはなぜか大鎌が握られている。
はじき飛ばした、はずだった。
「キミってば本当に変態だね」
果たしてそれは褒め言葉だろうか。
亜貴はその言葉に反応すらできず、両の脚を一度に攫われていった。

「チクショ、負けたか」仰向けに倒れた亜貴はため息をする。「いや、始めから両腕使えてたら……」
「言い訳でしょ」鼻を鳴らす。
亜貴の四肢はすべて不随になった。
もう倒れているしかできない亜貴に篠乃は言葉を吐きかけた。
亜貴は汗をだくだくと滴らせているが、篠乃は息が乱れた程度だった。
「でもキミって、強いね」大きく息をつく。「人間にしては頑張った方だと思うよ」
「それ、どう捉えても皮肉だよな」憮然として亜貴は答える。
「まあね」篠乃は鼻で笑った。
「最後、あれなんなんだ？　完全にはじき飛ばしたと思ったけど」
いま篠乃の手にある大鎌は、亜貴が完全にはじき飛ばした。それを亜貴はたしかに見た。見てから蹴りを入れようとしたのだ。それなのに、それは篠乃の手にあった。
「普通の鎌じゃないもの。出し入れくらい、自在にできるわよ」

「反則じゃねえか」亜貴は口を尖らせた。
「特権よ、死神のね」篠乃は笑う。「ていうか、キミ、痛くないの？　刈られたのは魂だけど、それでも刈られたらすごく痛いでしょ？　それこそ気を失うくらいに」
「あー、んー」難しそうな顔をした亜貴だが、すぐにそれは晴れた。
「もう慣れた」
「ああそう……」篠乃は呆れた。「キミって本当に……もういいや」
呆れついでに、もっと呆れることを篠乃は思い出した。
「それにしても」と冷笑にも似た笑みを見せる。「よく自分を捨て石に使った相手に、そこまで体、張れるわね」
「ああそれな。オレも腹が立ってしょうがねえよ」なんとかして四肢を動かそうとしているが、やはり無理だった。「でも一応、友達だしな」
そう言って亜貴は笑った。
それが篠乃には気に障った。
「本当に友達なの？」篠乃は鼻で笑う。「利用されてるだけじゃない？」
「友達にだっていろいろあるだろ」亜貴は言う。「何をしたら友達で、しなかったらそうじゃない、なんておかしい。俺は藤太のことを友達だって思ってるし、だったら藤太は友達だ」
篠乃はうまくかみ砕けない。
「もっとも」亜貴はつづける。「藤太がそう思ってるかは知らないが」
「なにそれ？」
「友達同士、てわけじゃあないかもな。そういう話だ」
「よくわからない」
「じゃあ無理だ」
そう言って亜貴は説明を投げた。
どうやら自分の理解できる範疇を超えている。篠乃はそれだけを思った。

「キミ、名前は？」篠乃は訊く。
「さっき言っただろ？」
「もう忘れた」
「おまえな……」亜貴は笑わない。「河野亜貴ってんだ。さんずいの方の川に野原、中途半端に貴いって書いてな」
「ふうん」篠乃は最後を流して聞いた。「ちなみに私は西崎篠乃ね」
「もう聞いたぞ」
「あれ、そうだっけ？」笑った。
亜貴は急に真面目な顔をして空を見た。
「どうして、藤太を狙う？」
「……昔ね、約束したのよ」ほんの少しだけ、声の調子が落ちた。
「命くれるって」
いままでの篠乃だったなら、どうでもいい、と返したかもしれない。
「またおおざっぱな約束だな」
「うるさい」大鎌の柄頭で小突く篠乃。「あのときはちゃんと説明したのよ。いまおおざっぱに言っただけ！」
精確に鳩尾へと入ったため、しばらく亜貴は嘔吐きは続いた。
「それで？」むせながら亜貴は訊く。「藤太はそのこと憶えてんのか？」
「……忘れてる」
語感には憎々しさがあった。
亜貴は短くため息をつく。予想できていたような反応だった。
「だったら」と亜貴は言う。「お前だって、今さら律儀に守る必要なんかないだろ？」
――所詮は子供の時分にした約束だろ？
亜貴は篠乃に説く。
初めからなかったことにもできるはずだ。相手が忘れているならば、なおさらのこと。それに、その約束は相手方にとって忘れてもいい、その程度のことなのだ。どうでもいいことに他ならない。そ

んなことに必死になるのは、馬鹿だ。
そんなことを亜貴は言った。
「うるさいわね」そして篠乃はそれを蹴った。「こっちにだって、いろいろあるのよ」
――死神の血ってのは、無意識に人の恐怖心を煽るもんなのよ。
思い出すのは母親の言葉だ。
これを篠乃は言い訳として聞かされた。一番辛かったのは、中学生のころだろうか。
ぎゅっと篠乃は左腕の袖を掴んでいた。
「いろいろ、あるのよ」繰り返す。
「まあ、あるだろうさ」亜貴は篠乃を見ず、生返事をした。
「一緒にしないで」
「それはすまん」そして笑う。「ところでオレって、もしかして一生このまま？」
篠乃は一瞬固まった。そして思い出したような表情を作った。
「人間に限らないけど、生命力ってすごいのよ」少し演技口調で篠乃は言う。「魂に限っていえば、斬って落としてもまた生え揃うんだから」
「ええと」その言葉を咀嚼する亜貴。「わかんねえけど、つまり大丈夫なんだよな？　それだったならいいや」
安堵の表情を浮かべた。
「ま、回復するのは生きてたら、の話だけど」篠乃は薄く笑みを作った。「キミ、ちょっと死んでちょうだい」
手には相変わらず、鈍色の大鎌が握られている。

## 3

藤太は街灯乏しい住宅街を疾走する。

見ようによっては、ハーメルンの笛吹き男を連想するだろうか。いや、やはりそんなことはないだろう。誰が目で見てもその少年が、猫を連れているのか、それとも追われているのかということは明らかだ。

ともあれ、藤太はひたすら逃げていた。その中でときに避け、かわし、またときに叩き落した。それでも叩き落とされた猫はすぐに立ち上がって追走を再開するし、もとより数が尋常でないのでそれだけで効果は乏しい。

しかし藤太にできることといえば現状それだけだ。あとは走りながら、この得体の知れない事態を脱する手段を講じるしかない。だが、未だその手段は見つけられない。

家路に就いているのだろう、そんな人間と何人かすれ違った。それでも猫たちの標的は藤太ひとりである。目もくれずにすれ違うだけだった。

――ふざけんな。

もちろん藤太は納得がいかない。どうして自分ばかりを狙うのかということだ。

時間を経るごとに猫の数は増えていく。最終的には町にいるすべての猫が追いかけてくるような気がしていた。

その想像を振り払う。不毛だと言っているのではない。単に想像したくないだけだ。

一匹の猫に並ばれた。民家の塀をつたって、高度は藤太の少し上。猫は藤太を横目で見ると、数歩ののち、顔面へと跳びかかった。

――しつけえ！

藤太は拳を作ってその猫を殴り払った。

それをこともなげにやってのけるほどには、猫の速度に熟れてき

たということだ。だがそこに嬉しさは感じない。
この一連の動作の説明としてはもうひとつある。拳を作ったということだ。今までは手のひら、または甲で払いのけていた。それを拳で払うようになったということは、変わらない現状に鬱憤が溜まったということはもちろんある。が、それよりも疲労のためというのが大きい。猫に追われ始める以前から藤太は走り通しなのだ。亜貴から受けたボディブローもそれに拍車をかけている。
拳を作って力まなければ、思うようにならなくなってきたのだ。
喉を通る息は、次第にぜえぜえという濁音をつけるようになった。立ち止まるわけにはいかない。それでも走っているのには限界がある。
――早く……早く……！
良案を必死に考えるが、頭に血がいかない。身体を動かしている限り、そのことに精いっぱいになる。
――どうする？　どうなる？
そんな思考回路が焼け焦げる寸前、一種の僥倖をみた。
それを見て閃いたとした方が正しいかもしれないが、ヒントとしては用途が限定されすぎている。
直線距離にして約五十メートル。タクシーが一台停車していた。ちょうど乗客を降ろすところだった。降りているのはＯＬ風の女性。夜道でひとり歩くのは心配だったのだろうか。いやそんな推察は、いまどうでもいい。
するべきは、一心不乱に駆けることだ。
――タクシー、タクシータクシー！
と、藤太は頭の中をそれ一偏にして、かすかに残る余力で駆けた。

後部座席にするりと飛び乗り、ドアを閉めるとともに叫んだ。
「とりあえず出して！」
驚きは降りたばかりの乗客女性そして運転手、その両方にあった。

運転手にしてみれば、運賃を受け取った矢先にまた新しい乗客である。客足がいいと捉えてもいいが、それでも尋常でない態度には不穏を第一に考える。

外の女性は悲鳴を挙げていた。おびただしい数の猫を目の前にしているのは、今は女性の方だった。おそらく猫の瞳からは焦点にさえ据えられていないが、受ける印象としては恐怖でしかない。

外の猫はなぜか攻めあぐねているようだった。いままで何匹もの同胞を屠ったその筐体を、一種の兵器のように見ているのかもしれない。

そうでなくても、この隙は脱出への兆しだった。

「早く！」藤太はまた叫ぶ。

力技である。運転手は状況を一切飲み込めない。どこへ車を走らせるのかも聞かされていない。なにより藤太は無数の傷を負っており、それだけで決して乗せていい客ではない。

それらの思いを気迫で捻じ伏せる藤太。

運転手はそれに負けて、とにかく車を発進させた。勢いが強くついたため、その際若干スリップを起す。周囲にタイヤの擦れる甲高い音を響かせて、タクシーは夜道の疾駆を開始した。

後ろを見ると猫も追いかけてきていたが、次第に小さくなって消えていく。

――やっぱり、俺のこと追ってんだよな。

藤太はそれを少し確認すると、深くため息をついてシートにもたれて項垂れた。安心が訪れる。

「お客さん」運転手はバックミラーで藤太を観察している。「どこ行くの？」

「とりあえず……」藤太は肩で息をする。「遠くの方……どこでも」

良案といえば限りなくそれに近い気がした。むしろ藤太は、なぜ交通機関に頼らなかったのか、ということが不思議でならない思いだった。現実的に考えて、走行中の車両ほど無敵に近いものはないだろう。常に移動するため捕まり難く、さらに外界と遮断されるた

め秘匿性も高まる。
藤太はなるべく信号を避けるよう運転手に言い含めた。
「あの大勢の猫……ってなんなんだ？」運転手が訝しんだ声をかけた。
客といっても藤太は所詮高校生である。厳密にゲストとして扱ってもらえないのかもしれない。運転手の目は異様な者を見る目だった。
「知らない」藤太は答える。
車内を清涼させるクーラーが藤太に気持ちのよさを与えていた。
「マタタビでも持ってんのかよ？」
猫が束になって追いかけてくる現象。その原因を無理やりにでも探ろうとしたら、それくらいかもしれない。
が、運転手は冗談で言ったらしく、質問のあとに自分で噴き出していた。
その面白さは、藤太には伝わらない。
「持ってない」ぶっきらぼうに言った。
――持ってないよな？
それでもその発言のあとに、着用している衣類のポケットを順々に確かめる。馬鹿みたいな種類の可能性も潰せるならそれに越したことはない。
いったん走り出した車内は驚くほど静かで、藤太は自分がする呼吸音の大きさを自覚した。すると不思議なことに、急速に頭が冷めていくのがわかった。
外の景色は常に流れていき、藤太はそれを呆として眺めていた。
いきなり手に入れた安全地帯。それは気の張り通しだった藤太を弛緩させるには十分だった。もう追われることはないだろう。座席シートにもう一度深く腰掛ける。血は乾いて止まっていた。多数ある傷口のひとつに触ると、鋭い痛みがよみがえる。
――消毒、した方がいいな。
そんなことまで考えるほど余裕ができた。

その思考は油断である。それを自らの評価で馬鹿と下した。
藤太は目先の緊急事態に失念していたのだ。目下、逃げている対象は猫でなく死神だということに。
ヘッドライトに照らされた道の先に、人影が見えた。笑っている。
「なんだ、アレ？」運転手が訝しんで声を挙げる。
その次の瞬間、轟音がなった。聞くに堪えない金切りの音も響く。
同時に藤太は前へと投げ出される感覚に襲われる。その最中に藤太が見たものは、帽子の取れて露わになった運転手の禿げ頭と、それを柔く包むエアバック。
交通事故だとすぐに悟った。その間にも車は縦方向にひっくり返り、上下が逆さまになっていく。シートベルトをしていない藤太は車外へと簡単に投げ飛ばされた。
空中を舞うのは本日二度目だが、今度は最後まで気を失わない。
まだ余熱の残るアスファルトに全身をぶつける。優しくないほどに堅かった。
――ガッ！
そこに打ち付けたあと、藤太は転がる。受け身は取れたがそれでも痛い。
痛みに打ちひしがれる中、タクシーを無意識に見た。
藤太を守っていたはずのそれはやはり逆さまで、タイヤが力なく空を回っている。無惨というより仕方がない有様だった。
運転手は車内に残されている。ハンドルを握った手はそのままで、血が滴っていた。大きくは動かないが胸が小さく動いている。生きてはいるようだった。
ボンネットが飛ばされていた。それは本体からやや離れた位置に落ちている。街路灯の光を反射させて、白く光っているように見えた。
そしてそこに、ふわりと降り立つ足がある。着地の音など微塵も立てなかった。
藤太は確かに確認した。

視線を上げると、やはりいた。
――西崎篠乃。
「ダメじゃない」下方向の三白眼。赤い唇からのぞく真白い歯。「逃げるなら自分の力でしょ？」
右手で持った自身の大鎌を突きだして、彼女は優しく笑っていた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7650w/

死神鎌と恋心

2011年10月7日03時19分発行